

42179

教科書文庫

4
810
42-1923
200030 2420

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

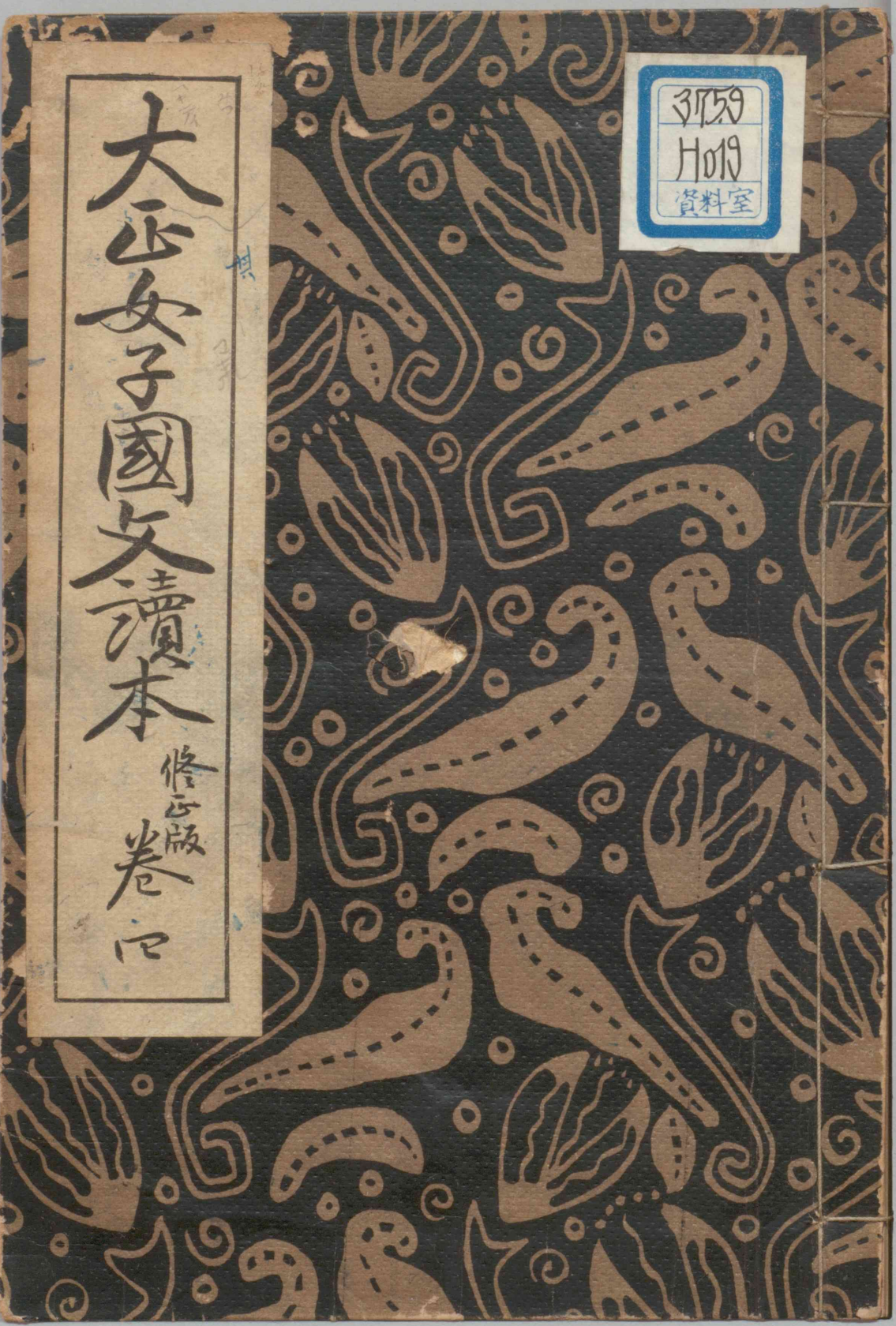
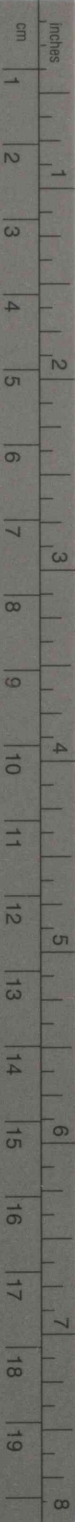


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
H019
資料室

大正女子國文讀本
修正版
卷四



375.9
H019

資料室

大正二十二年二月一日

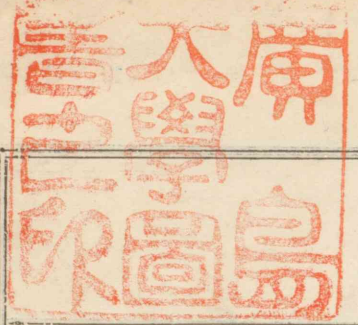
文部省檢定

高等女子學校國語教科用

保科孝一編

大正女子國文讀本

東京 會社育英書院發行



大正女子國文讀本 修正版卷四

目次

一	讀書	坪内雄藏	一
二	二葉の薫	池邊義象	六
三	我は野の菊	鹽井雨江	四
四	月と植物	三好學	八
五	筑波まうで その一	大和田建樹	三
六	筑波まうで その二		三
七	病み給へる師の許に		三
八	奈良の御所柿	正岡子規	三

目次

九 伊勢參宮……………田山花袋…四

一〇 晩秋小品……………徳富蘆花…四九

一 野路……………四九

二 月を帯ぶる菊……………五〇

三 郊秋……………五二

一一 たき火 その一……………國木田獨歩…五三

一二 たき火 その二……………五五

一三 乃木夫人の儉素……………遅塚臈水…五六

一四 夫の名譽を祝はれし挨拶……………八代操子…七一

一五 中央公園……………厨川白村…七三

一六 滋賀の山越……………村井弦齋…八二

一七 忠信吉野にとどまる……………(義經記)…七九

一八 甲冑堂……………(東遊記)…一〇三

一九 雪の山里……………橘南谿…一〇七

二〇 大石良雄 その一……………山路愛山…一二二

二一 大石良雄 その二……………一八

二二 鶯宿梅……………藤岡作太郎…一三五

二三 徳川光友の室……………熊田葦城…一三八

二四 山伏姿の俊基……………楠公夫人…一三三

二五 春を待ちつゝ……………島崎藤村…一三九

二六 春のおとづれ……………三宅やす子…一四五

二七 ナイヤガラの瀑……………澁川玄珥…一四九

二八 俳句評釋……………五 桐子規…一五



大正女子國文讀本 修正版卷四

一 讀書

常に良き書に親しむ者は、只ひとり居れども寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平憂悶も之を忘る。「書は少時の滋味にして老後の娛樂なり。順境には心の節ともなり、逆境には庇護と慰安とを與ふ。家に在れば心を樂しましめ、外に出でたる時も邪魔とはならず。

キケロ
(前106-43)

夜の伴、旅の伴、僻地の伴と羅馬の名士キケロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。諺に「百聞一見に如かず」といへるは、何事も其の身親しく經驗するに如かずといふ意味なれども、人の壽命に限あれば、七十・八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは幾何もあるべからず。我が日本國內の山水・風俗だけにて、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大なるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗の狭く、淺く、小さく、且少かるべきは

ランビキ
蒸溜器

言ふにも及ばぬことなり。さればこそ、今も昔も苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人には、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て之に親しまんことを願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けてこのかた、凡そ三千年間に出でし大賢・高德・碩學・天才の、經驗・觀察・思索・想像をそのまゝに、又はランビキにかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可なり。固より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なるものをも、

ミルトン

ペトラルカ
(1304-1374)

遠く且大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして良書の助を藉ることなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も、僅に一斑を窺ふに過ぎざるべく、其の一斑だにも正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、兼ねて智を研く砥石なり。しかながら讀書の用は尙之に盡きたるに非ず。伊太利の詩人ペトラルカは曰く、余に良友あり。彼等は皆名士・大家にして、何れも偉業を成したる者なり。余若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで

チャンニン
(1730-1842)

ミルトン
(1608-1744)

我が請を容る」と。これ、良書が常に其の讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングも亦曰く、「吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、おもに書籍の媒介に因る。而して、かゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑、吾人に對ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人の爲に吐露す」と。英國の詩人ミルトンもまた曰く、「良書は保全踏襲して後世に傳へられたる俊傑の貴重なる生血なり」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なること、かくの如きものもあるか」と歎ずるなり。若し假初にも其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、之に倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書用の極れるに近しといふべし。

(坪内雄藏—中學修身訓)

二 二葉の薫

坪内雄藏
逍遙と號す。
文學博士

松平信綱
武藏川越城主
(三六—三三三)
徳川三代將
軍

家光 (三六四—
三二)

慶長元年

後陽成天皇の
御代 (三五〇)

大河内久綱
三河國寺津の
領主

松平伊豆守信綱は、徳川三代將軍に仕へて、名譽ある人なりき。此の人の幼かりし時の事ども、聊か書きしるし、梅檀は二葉より香し」と云ふ諺の、空しからざる事を證せんとす。信綱は慶長元年十月晦日に生る。大河内金兵衛久綱の嫡子、母は深井藤右衛門好秀と云ふ者の女なり。幼名を龜千代と云ひ、後長四郎と改めぬ。幼少の時より氣象人に優れ、野邊に出でて鳥など追廻すに竹垣の中など割つて通り、振袖の中に、竹の先の入りたるをも覺えず走り歩き、或は宿に歸りて始めて袖の

なきを知り、下部のもの野邊を探し歩けば、二間ばかりの竹の先へ、袖のかゝりたるを拾ひ來りしことなどもあり。
 斯く亂暴なりければ、母は「咎過もあるべきぞ」とて、しばし諭しけれども、聞きいるべくもあらざれば、時々押伏せて、「小灸にては利くまじ」とて、大灸をすゑしことも少なからず。其の頃は五六歳の齡なりしが、能く此の事を記憶して、成長の後、をりく、母に向ひて、「きつい戒をなされたり」と云ふことありて、母も已むなく打笑ひてありきとぞ。

小田原落

天正十八年、
 秀吉、北條氏
 政を亡ぼして
 小田原城を落
 す

此の母も男まさりの女丈夫にて、随分手荒きことして、其の子達を扱ひしことあり。小田原落の時などは、三人の女の子供を連れゆくとして、三人の袂に帶を引通し、其の端を自分の腰に結びつけて、「汝等よくよく聞け、武士の子は女人とても、男子に劣るべきにあらず、敵に引渡しては無念なり、敵の近づかば、汝等を先に突殺して、其の後に自害せんと思ふ」とて、齒をくひしぱりつゝ、退きたりと云ふ。

松平右衛門大夫正綱は、信綱の叔父に當れば、常に相往來したりしが、或時信綱、正綱の獨坐の處に至りて

松平正綱
 正次の養子、
 信綱の養父
 (1591-1632)

「私儀御願ひ申したきことの候」と言へば、正綱「そは如何なることか」と問ひければ、別儀にもあらず、某は御代官の外様者サマノの子にて口惜しくこそ候へ。恐れながら御苗字を下され、御養子になし下されたし」と云ふ。正綱打笑つて、「さすがは稚き子簡なり、何とて本名を捨てて、我が養子を望むらん、尤も訝し」と尋ぬれば、信綱「さやうに候。本名にては上の御近習叶ひ難し。御養子になりてあらば、若しや御座近く御奉公もなるべきかと思ふばかりの事に候」とおとなしく言ひたるを、正綱不便がりて、「然らば養子ともすべし。」

秀忠

徳川二代將軍

(一三三九—一三九二)

竹千代

家光の幼名

されどまづ其の方の父母に申して後取極めん」と言ふを、信綱「そは我が身より父母に申しつかはすべし、今夜より松平を許させ給へ」と、やがてそを名乗つて、正綱の家に留りぬ。これ信綱八歳の時なり。此の事いつとなく秀忠將軍の聽に達し、「さばかりの志あらんものならば、召使はん」と沙汰ありしに竹千代君誕生ありければ、頓て其の御小姓に召されたり。素より賢明なる信綱なれば、子供ながら其の心入れ並々ならず。或時將軍大奥へ入らせらるゝとて、信綱に劍を持たせて、丑の刻の頃まで、長廊下の幽暗な

る處に伺候せしめられたれば、將軍大奥より出でらるゝ頃には、信綱は居睡りゐたり。將軍このさまを見て、そつと其の持ちたる劍を引取り、持行かせ給ふを、信綱ふと目を覺し、「何者ぞ」と後追掛けて、其の人に取附きたれば、こは如何に將軍なりけり。信綱の面目なげなる様を將軍見てとり、「奇特なる小兒かな」とて、御感斜ならず、「此の心一生放すな」と、却つて御褒美ありけり。

又御城に宿直の時などは、食事中とても、將軍より召さるゝ事あれば、食ひさして御用を勤め、冬などは、深更になりて湯も茶も既になく、氷の如き飯を食ひし事も度々なりき。又夏は夜更くるまで御奉公して其のまゝ、廊下等に打伏せば、蚊にくはるゝことも屢にて、或時など、朝倉筑後守このさまを見つけ、「いとほしのことよ」とて、蚊帳を吊りやりし事もありき。されば正綱も大いに悦び、それ程の心掛ならば、屹度立身もすべし」とて、感涙を流したりとぞ。是等は九歳十歳の頃の事にして、竹千代君の命によりて、雀の子を取りし騒も、此の後のことなり。

朝倉筑後守
名は宣政、初
秀吉へ仕へ、
後徳川氏に仕
ふ

池邊義象
國文學者
歌所寄人
御

世にも名高き名譽の人となりたり。

(池邊義象——武士道美譚)

三 我は野の菊

我の野の菊種のもたら

問ふもすま世の鶴もば

作る自然さこそらありて

化るぬこれの野の草よ

われは野の菊種のもたら

問ふもすま世の色は香を

そむる自然さこそらありて

化るぬ我が身は野の草よ

我も我の菊野のもたら

問ふもすま世の色は香を

そむる自然さこそらありて

低き我が身は種のもたら

われを種は葡萄野のそたら

らいつけきぬ君問ふまね

ひろき自然さくらあて

少なきふれは種はいつら

弱きさくらを問ひますね

風さつぐの世はあした

雨さみぐ乃世のゆた

さぼるぞと少なき此の袂

弱きさくらを問ひますね

露ほろくの世のゆた

雲むくくの世のゆた

さぼるぞはわさき此の袂

生れし野邊にかくまて

つる自然さくらあて

野葡萄のほろりもたごつ

鹽井雨江

名は正男。文學士、國文學者。大正二年歿、四十五歳

天地の意氣を恥ぢぬわれ

(續花紅葉—塩井雨江)

四 月と植物

月は季節によつて光の感じが一樣でない。春の夜は曇り勝で朧月が多い。夜櫻を月に配合して見ることもあるが、月の光で唯薄明るく見えるまでで、とても朝日に匂ふ山櫻といふやうな、優美な且壯快な觀念は起らぬ。夏の月はこれに反して、

庭の面は云々

源頼政の歌

庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなくすめる月かな

と詠んだやうに快活なもので、殊に木の葉、草の葉に置かれた雨の雫が月の光に映るときは、一層の涼しさを増す心地がする。又秋の最中の満月は、空に冴えて最も明るく見える。

暗香の浮動する云々

宋の林和靖の梅を詠じた詩中の句。疎影横斜水清淺。暗香浮動月黃昏

月夜によい植物はあまり多くはない。かの暗香の浮動を賞する梅なども、花はやはり晝の方がよく見える。又松が月に對して可なり趣のあるのは、杉や縦のやうに、枝がこんもりと茂らないで、針のやうに

其角
榎本氏、元祿
時代の俳人。
芭蕉の門人

細長い葉がまばらについて、月の光が葉の間から漏れて来るからである。其角の

名月や疊の上に松の影

も、松であるからこそ映つた影がそれと知られるのでも、もしこれが樅や杉又は檜などであつたら、唯眞黒な影がさすばかりで、何の趣もない。蓼太の

蓼太
大島氏、天明
時代の俳人

さみだれやある夜ひそかに松の月

など、いかにもよく時と處を聯想させて、僅々十七字中に無量の意味が含まれてゐる。

其の外柳の月、竹の月、梧桐の月なども、それごとくみな

三好學

植物學者。理
學博士。東京
帝國大學理學
部教授

多少の趣味をもつてゐる。又秋の野の満月、夏の曉方の月なども、草原や木立に配合すると、月の情がよくあらはれる。

(三好學—植物形態美觀)

五 筑波まうでその一

筑波

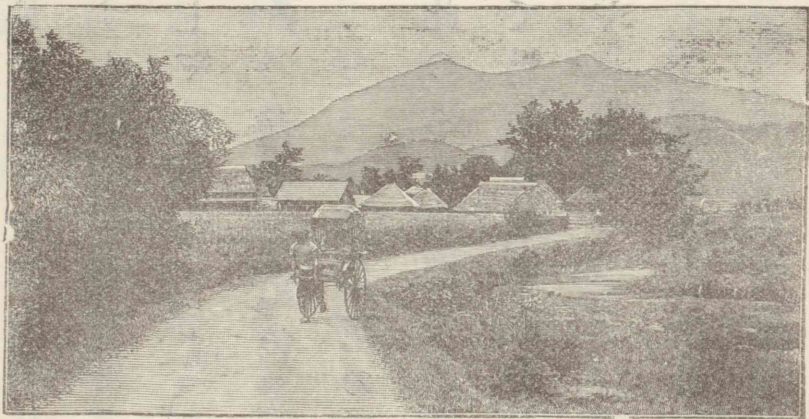
茨城縣筑波郡
にある山。嶺
は男體、女體
の二峯に分れ
てゐる

明くれば雨になりぬ。さりとして已むべきにもあらねば、濡るゝ覺悟にて朝飯を促し、箸とるゝ見渡すに、谷も山も霧こめて、雨いよくしめやかなるに、軒近き桐の梢には、雀の飛びかふも見ゆ。行く道ならずば、却りて興ある景色なるべきに。車夫に案内せ

彰仁親王
小松宮、邦家
親王の第五子
仁孝帝の養子
(二四七—二五三)

させて宿を出づ。雨やみたり。石段を登りて拜殿にぬかづく。入口には御神橋とて、赤き欄干わたせる太鼓橋あり。雲に聳ゆる樓門あり。寶前の額は忝くも彰仁親王の御筆にて、神號の文字たふとく仰がれ給ふ。櫻の紅葉のいと艶やかなるが、銀杏の黄なると相映じて立てる美しさよ。

左へ坂を登れば、男體山道といふ石立てり。是より木の根岩角、迂る足を踏みしめつゝ、梯子の如く急なる道を攀登る。時々こぼるゝ梢の露は雨よりも繁く、燃立つ顔に降りかゝるも、なかく憎からず。枝



さしかはす松杉は、天を蔽ひて晝も暗きに、立雑る木の葉の色、松明の光と見えて、道照らし顔なるも面白き山路なり。特に美しきは白膠木にて、楓は餘り多からず。何やらん山彦かへして呼び應ふる鳥、忘れたる様にて折々鳴く。櫻塚と云ふに名木の櫻あり。見渡せば、來し方の紅

葉、松の木の間に染めて花よりも美しく、谷水の聲かすかに響き出でたるは、畫師の筆にも寫し取らるべしやは。

薄からぬ色見せんとや村時雨

夜の間に神のくだし添へけん

此のあたり楓やうく目につきたり。青葉の雜りて見ゆるは、山廣くして神のたくみの未だ届かぬにやあらん。

筑波山たにのみぢは誰まちて

秋ひとしほの色のこすらん

蘆穂山 茨城縣眞壁郡
我國山 茨城縣眞壁郡
加波山 茨城縣眞壁郡
眞壁 茨城縣眞壁郡
眞岡 茨城縣眞壁郡
櫻川 茨城縣眞壁郡
宮の東方五里
栃木縣芳賀郡
在る
東那賀村の櫻
傍。兩岸に櫻
が連つてゐる
作者は、此の
曲の櫻川は此

登りつめたる處を五軒茶屋と云ふ。平にして北の方打開けたり。「まづ目の前に、波の如く魚の背の如く、横たはり伏して眺めおろさるゝは蘆穂山、其の右なるが我國山、其の左なるが加波山なり」と車夫教ふ。其のこなたなる一群の人家は眞壁、遠く霞めるあたりや、木綿もて知られたる眞岡ならん。「白くうねり行くこそ櫻川よ」と、聞くにも懐かしさ音ならず。雲をへだてて「へ」の字なりに見ゆるは、陸奥境の八溝山にして、二十番の觀音のある處なり。茶店のあるじ曰く、「此處は水戸浪士の籠りし時に、切開かれたる跡

の地である。故に「懐かしき音ならず」と云つたのである。
 八溝山 岩代、常陸の連亘する五里に藤田小四郎の御筆を額にしつゝ、常に忘れずとて、指さし示す方を見れば、依雲亭の文字は黒くふすぶりたる板に残りて、藁屋の軒に仰がれたり。こゝより更に道をかへて、左の方へ登らざるべからず。道愈、峻しく、紅葉愈、美し。最早染めのこしたる梢も見えず。花か錦か。黄なるさへ樺なるさへこきまぜたる、秋のわざこそたくみなれ。

夜な〜に神や錦を急ぐらん

つゆとしぐれを織姫にして

喘ぎく〜巔に上れば、風寒くして汗もいづくに行きつらん。千木高知る神の宮居は、南面してぞ立たせ給ふ。こゝより女體山を北に望めば、同じ千木造りの宮の雲透に見えて、呼ばば直ちに應へつべく、旅人もし我より先にあらば、蟻の形してや見出だされなん。廣前より下を望めば、切りたてたる如き岩の底には、松の緑のひま〜に、紅の梢をこきちらせる様、彩色よくせる土佐繪に打向ふ趣あり。若草に似たる松、躑躅に似たる紅葉、誰か此のあたりに隨身具し

土佐繪 平安朝の繪。藤原基光の末孫。能開いた。藤原の派。歴史名畫の一。有て。名畫である。

筑波町
茨城縣筑波郡
筑波山南方の
山腹、三三〇
乃至八二五尺
の傾斜地を占
めてゐる

たる物見車を書き忘れし。今朝出て來し筑波町、遠く小さく見えて、いよく我が立つ巖の天に近きを覺えしむ。下りて木の間を潜り、岩踏みしだきつゝ、立身石と云ふを見に行く。十丈もあるらんと見えて、壁の如く立てる岩の面を、垂れたる鎖傳ひつゝ、攀ぢのぼるなり。仰ぎ見てさへ肝をのゝく。岩の上より見下せば、腰をめぐる紅葉小さくして、仰ぎしよりも更におそろし。

六 筑波まうでその二

五軒茶屋に歸りて、預け置きたる傘、外套など受取り、これよりは女體山として右の方へ入る。雲やうやく晴れて、日影たのもしく漏れ來れり。

もみぢ葉を片敷き伏して筑波山

神に一夜のやどや借らまし

鶴鶴石、中岳の神社など拜み過ぎて、女體山の嶺にいたる。

後の巖に上れば眺望残る所なく、霞が浦を案内にして、近くは土浦より、遠くは鹿島銚子のあたりまで、霞

霞が浦
茨城縣千葉の
二縣に亘る、
周囲三十四里
十七町

土浦
茨城縣新治郡
に在る。南は
櫻川、北に霞
が浦、人口約
一萬三千

鹿島
茨城縣鹿島郡
の東端にある
人口約二千四
百

銚子
千葉縣海上郡
千葉縣海上郡
に在る。利根
川、人口約六
千

みながらも見遣られたり。刈りはてたる田づらには、おりゐる鳥さへ見ゆる心地して、豊けき秋の煙樂しげに満ちわたるこそ飽かぬさまなれ。さてもそなたの空に雲なかりせば、富士の雪とも物言ひかはさるゝと聞きしを。此の山の麓に續きて松林に包まれ立てる一群の紅葉あり。車夫に問へば、「白瀧なり」と言ふにぞ、「歸りに廻らんは如何に」と言へば、「二里半もあるべし」とて澁々なるを、強ひて勸めて下りに向ふ。赤き欄干の橋ありて、天の浮橋と名づけたり。渡る折しも、飛びちる雲のたはむれにや、顔に時雨を

打注ぎぬ。

引きあげし矛の雫の面影に

村雨わたるあまの浮橋

これより道又急にて、鎖の力を借る事も處々に在り。數多ある神社拜みまはりて、胎内くゞりを抜け、高天の原と云ふ岩のもとを経て、辨慶七戻と云ふに出づ。いかめしき岩の二つに割れたる上に、又一つの大岩かぶさりて屋根となりたる處を潜り行くなり。傳へ云ふ、武藏坊或時鈞鐘を脊負ひて、女體山に登らんとせしに、屋根なる岩搖ぎて落ちんとせしかば、七た

武藏坊
辨慶。源義經
の臣、文治五
年衣川で戦死
した

安宅の關

石川縣能美郡
小松の西一里
關址は今海
中に陥つたと
云ふ

びまで後しざりしつゝ、遂にえくららずして止みに
きと。たゞ惜しむ、安宅の關にては機智を出しつる
辨慶が、此の山にては、上なる石をはねのくる智恵す
らも出ださざりしを。

行き行けば、神の高嶺は雲薄くかゝりて、帷の中なる
錦見る心地しつゝ、名残は盡きせず。千木の影、紅葉
の色、晝よりも美しく、夢よりも幽かなり。

薄衣かけたる雲のたえまより

こぼれて見ゆる神のおもかげ

見返れば雲より上になりけり

わが分けきつる山のもみぢ葉

白瀧のあたりは殊に木深くして、見上ぐる梢もみぢ
ならぬはなし。其の間より、晒せる布の色して落つ
る水、誰かは人界の物と見るべき。不動堂ありて、瀧
の水を笕に受け、幾筋も落させたり。車夫と共に、思
ふやうに瀧を評し紅葉を賞すれば、水亦自然の聲し
て、秋とも冬とも知らず顔なる歌を歌ふ。歸さの道
は山の麓を巡りて、直ちに筑波町に向ふ。観音堂の
山茶花、薄紅に咲亂れて、岩の下くゞる水更に浮世の
外なり。

(大和田建樹—散文韻文深山櫻)

大和田建樹
國文學者。明
治四十三年歿
五十四歳

七 病み給へる師の許に

一昨日は參上いろく、厚き御もてなしに預り、かつ歸京の節は遠路わざく、御送り下され、厚く御禮申上候。かねてよそながら御察し申上候ひしよりは御宜しき御様子を拜見致し、誠に嬉しく安心致し候。さりながら御宜しとて昔の御壯健に御恢復遊ばされ候はんは、なかく、容易の事にこれなかるべく願ま、此の上とも御油斷なく御養生遊ばされたく願上候。久々にてゆるく、御話承り、嬉しくも悲しく

わが墓を
問ひ來む人は
誰々とねられ
ぬまゝにかぞ
へつるかな
ともかくも
この秋までは
一度の萩の花
見む
おはしへど
かくて死なる
る身にもあら
ず早うちやめ
ね人あひの鐘

も、様々懷舊の情に堪へがたく存候ひしに、數々面白き悲しき御歌承り候ひし中にも、「わが墓を」ともかくも「さては」さはいへど、など哀れに悲しき御歌には、涙のみ催されて、申上ぐべき言葉もおぼえず、さぞかし言ひがひなき者と思召され候ひし御事と、御恥しく存候。いかで御徒然の御心をも慰めまゐらせたくと存じながら、思ふことも申上げられず、今更残念に存候。此の後御面會の折には、御全快の御喜びを詠ませ給ひし御歌など承りたく存候。御約束申上候ひし三日月豆、砂糖の代りに鹽の衣をかけたるもの

を今朝註文致し候處、今晚ならでは出來ぬよし申候
につき、出來次第御送り申上ぐべく候。尙末ながら
御令息様へもよろしく御傳へ下されたく候。先づ
は右申上げたく。かしこ。

二十六日

みさ

落合先生

みさ
國分みさ。落
合門下の歌人
落合先生
名は直文。國
學者。明治三
十六年歿。年
四十二

八 奈良の御所柿

明治二十八年、神戸の病院を出て、須磨や故郷をぶら
ついた末に、東京へ歸らうとして、大阪まで來たのは

十月の末であつた。其の時は腰の病のおこり初め
た時で、歩くのに少し困難を感じたが、奈良を見よう
と思つて、病を推して出掛けて行つた。

三日ほど奈良に逗留してゐたが、其の間は、幸に病氣
も強くならなかつたので、十分おもしろく見ること
が出来た。

時は丁度柿が盛りになつてゐる時で、奈良にも奈良
近邊の村にも、柿の林が見えて、何とも言へない趣で
あつた。柿などと云ふものは、從來詩人にも歌よみ
にも見離されてゐたもので、殊に奈良に柿を配合す

ると云ふ様な事は、思ひも寄らなかつた事である。余は此の新しい配合を見つけ出して、非常に嬉しか



正岡子規

つた。或夜夕飯過

ぎて後、宿屋の下女に、まだ御所柿は食

へまいか」と言ふと、

「もうあります」と言

ふ。余は國を出てから十年の間、御所柿を食べた事がないので、非常にこひしかつたから、早速、澤山持つて來い」と命じた。やがて下女は、直徑一尺五寸もあ

りさうな錦手の大井鉢に、山の如く柿を盛つて來た。流石柿好きの余も驚いた。それから下女は余の爲

糸瓜喫て

に、庖丁を取つて柿をむいてくれる。

僕の

やがて柿はむけた。余

つありし

はそれを食べる、彼は更

佛

正岡子規筆蹟

に他の柿をむく。柿も

旨い、場所も良い。余は

うつとりとしてゐると、ぼろんと釣鐘の音が一つ聞えた。彼は「おや、初夜が鳴る」と言つて、なほ柿をむき

筆蹟
糸瓜喫て痰の
つまりし佛か
な

東大寺
華嚴宗の大本
山、聖武天皇
創建

大佛殿
東大寺の中堂
本尊は金銅の
盧舍那佛

つゞけてゐる。余には此の「初夜」と云ふ言葉が非常に珍しく面白かつたのである。「あれはどこの鐘か」と聞くと「東大寺の大鈞鐘の初夜です」と言ふ。「東大寺が此の頭のりへにあるか」と尋ねると「すぐ其の處です」と言ふ。余が不思議さうにしてゐたので、女は室の外の板の間に出て、其處の中障子を明けて見せた。なるほど東大寺は自分の頭の上に當つて居る位である。何日の月であつたか、そこの荒れた木立の上を、淋しさうに照らしてゐる。下女は更に大佛殿の後の方を指さして、「夜はあそこへ鹿が來て鳴

正岡子規
名は常規、三十八
人。明治三十
五年歿、三十
六歳

山田
伊勢の國の東
南部に位する
宇治山田市の
西部の稱。も
と、宇治町と
山田町と二つ
であつたもの
を、今は合し
て宇治山田市
といふ

きますから、より聞えます」と言つた。(正岡子規「ほととぎす」)

九 伊勢參宮

山田の停車場を下りると、すぐ電車がある。この電車は内宮の方へ行くのと、二見の方へ行くのと二つにわかれてゐる。しかし先づ外宮を參拜するためには、この電車は用はない。ぐんぐん歩いて行くと、すぐ突當りが外宮の正門になつてゐる。外宮は一の華表、二の華表、三の華表と、だんぐん入つて行く。こゝに注意すべきことは、境内で煙草を飲

んだり、帽子を被つたり外套を着たりしてはならないことである。もし知らずにそれをすると、きつと巡査にしかりつけられる。やがて正殿の前に行く。例の伊勢式の建築で、頗る神々しい。ここに手洗所がある。そこで口そゞぎ、手洗ひ、そして三拜するのである。

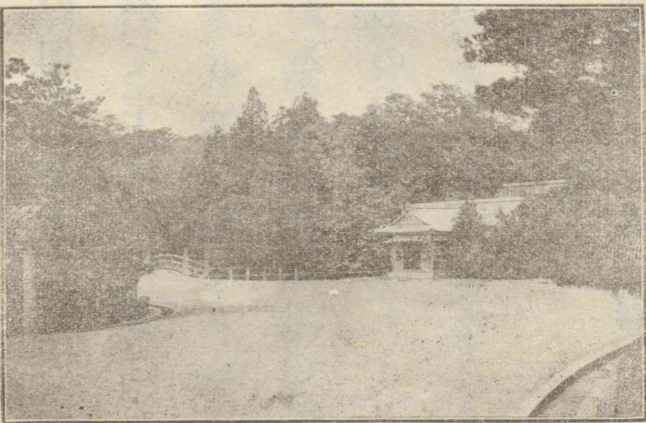
そこから出て來ると、神苑がある。綺麗になつてゐる。その正面北側に農業館がある。これから内宮へは電車でも行けるが、旅客にはその間を歩いてもらひたい。なぜならば、その間には昔の榮えた時分

古市
宇田市の
中にある町。昔
の市場

間マの山
古市の中にあ
る地名。もと
一帯の岳陵で
あつたが天正
年間に切開い
て坦途を通じ
た。内宮外宮
の間にある丘
だから間マの山
といふ

の古フキイ市の髣髴を見ることが出来るからである。町の通は昔のまゝになつてゐて、それで衰へてゐる。通の狭いのも面白い。やがて間マの山ヤマに着く。昔は例のお杉お玉がゐる。三味線の撥で巧に錢を受けたところである。この道はかなり長い。少くとも一里近くあると思はなければならぬ。それに

外 宮 の 神 苑



坂がある。で、だんく、内宮近くなつて行くと、町どほりは再び賑かになつて、名物の烟草入を賣る店がだんく、あらはれて來る。やがて宇治橋のところに着く。

昔はこの宇治橋の下には乞食がゐて、大きな網で客の投げる錢をすくつて拾つたものだが、今はもうそんなものは見たくも見られない。それほどあたりが綺麗に掃除されてゐる。

橋を渡つて境内に入る。小砂利の上に松が靜かにその影を落してゐる。守衛の巡查がこゝをぶらり

ぶらりとしてゐる。いかにも神々しい。やがて五十鈴川の畔に來る。そこで口を漱ぎ手を洗ふ。水がいかに綺麗で、石がすき透つて見える。

やがて杉の葉の緑の濃かな中の路を奥へと入つて行く。大麻授與所、五丈殿、四丈殿などがある。

で、正殿の前に跪いて參拜する。流石に氣がすまずには居られない。用材も建築も外宮と同じだが、唯屋上の千木の切尖がちがふのだと云ふ。

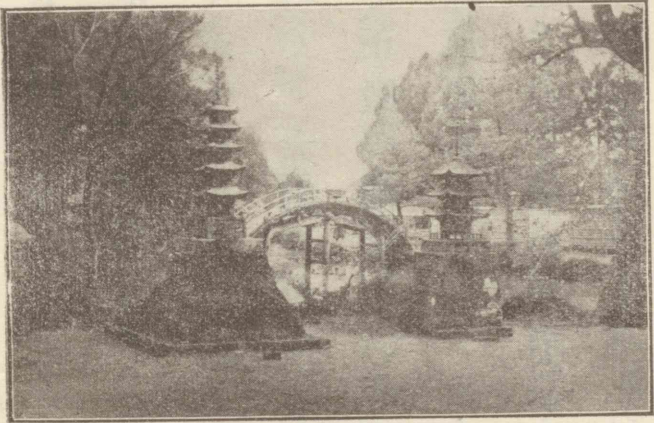
再び宇治橋に戻つて、そこから五六町來ると、二見に行く電車の停留場がある。そこで乗ると、電車は逸

二見
宇治山田市の
東々北二里ほ
どの處にある
町

早く町を離れて、田圃の中を横ぎつて向ふに行く。

萬金丹

昔から名高い薬で、その行商人は日本中を廻つたものである。朝熊山頂上にその本舗がある。



朝熊山の頂金の剛證寺

して険しくはなかつた。二三町のぼると、あとは山

かなりに早い。窓から右に高い山が見える。それが例の萬金丹で聞えた朝熊山である。

朝熊山へも暇があつたら一度は登つて見るが好い。私は内宮の傍のところから登つていつた。さう大

とうふや
名高い旅館

神社
朝熊神社

朝熊の寺
山頂にある金剛證寺

の背のやうなところで、一里ほど行くと、例のとうふやのところへ出る。二見から登ると、そこへ出るのだが其の方は路がある。とうふやのある處は名高いところであつて、頗る風景に富んでゐる。神社から二見にかけての伊勢灣が一目に見えて、志摩の山の連亘が波濤のやうに見える。こゝから朝熊の寺まで二十町ほどである。女子供にはちよつと荷がかちすぎる。

二見に行く電車は、廣い入江のやうなところにかけた橋の上を通つて行く。到る處すべて感じが好い。

春先など殊にさう思はれる。一時間とかゝらない中に電車は二見に着く。

二見は猫の額のやうな狭いところだが、ちよつと好いと思ふ。伊勢では海水浴はやはりこゝだ。これで松がもう少し多く海がもう少し遠いと猶好いのだが、惜しいことには波がちと高すぎる。このあたりには例の土産物の貝細工を賣る家が非常に多い。そこから海岸を二三町傳つて行くと、例の太い注連繩をかけた大小二つの岩が海中に浮んでゐる。始めて見るものにも、さう大してめづらしいとは思へ

田山花袋
名は録彌。小
説家。紀行文
にも巧である

ない。何だか子供だましのやうな氣がする。丁度朝日がその傍から浮ぶやうに上るので、それが名勝になつてゐるのである。

(田山花袋一旅)

一〇 晩秋小品

一 野路

野路行けば、粟の取入れのさかりにて、稻の取入れもぼつ／＼始まりぬ。蕎麥雪の如く、甘藷の畑は彌繁りに繁れり。百舌鳴く村に、紅なる、黄なる、星の如く柿の實の照れるを見よ。

彼岸花・螢草・野菊・蓼、小さき粟の如く、稻の如く、黍の如く、燕麥の如くなる八千草に鳴く蟲の音を踏みわけ行けば、蛙飛び、螽斯飛び、稀には蟹がさく／＼とかくれ行く。

二月を帶ぶる菊

墨繪の如き樹影を浴びて、獨り中庭の夜に立てば、月を帶ぶる白菊、仄かに薰りて、花と月との囁く聲も聞えぬべき心地す。俯きて其の一枝を折らんとするに、しと／＼の露に濡れたり。折れば月影ほろ／＼とこぼれぬ。

朝來の雨止み、風息み、月夜の靜味いひ盡し難し。何に動かされてか、井戸側の無花果の葉のがさりと鳴りし後は、一庭寂然として、月と影と共に眠りぬ。唯稀に檐滴の、陰暗き方に私語するのみ。

三郊秋

柿の落葉を踏みて後山に登る。黄茅蕭々として亂れ、龍膽の碧、棗實の紅と徑を綴る。山上より見れば、田は悉く刈られ、麥の綠なほ仄かにして、村も瘠せたり。晩秋の野いたく寂びぬ。

鴉五六羽あり、山上の樹より起ち、鳴きつれて彼方の

徳富蘆花
名は健次郎。
小説文章の名
家

村に向ふ。 啞々の聲満山に響く。(徳富蘆花——自然と人生

一一 たき火 その一

北風を背になし、枯草白き砂山の岨に腰かけ、足なげ
いだして、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見
送りつゝ、沖より歸る父の舟遅しと待つ逗子邊の童
の心、その淋しさうら悲しさは如何あるべき。

御最後川の岸邊に茂る葦の枯れて、吹く潮風に騒ぐ
其の根がたには、夜半の満汐に人知れず結びし氷、朝
の退潮に破られて残り、ひねもす解けもえせず、夕闇

逗子
神奈川県三浦
郡田越村の海
濱。鎌倉の東
南約一里
御最後川
田越川の別名

六代御前
平維盛の子。
剃髮して妙覺
と號す。僧文
覺の異圖に坐
して斬られた。

「六代御前の
杜」とは其の
墓所の森を云
ふ。田越川の
邊に在る

に白き線を水際に引く。 若し旅人、疲れし足を此の
ほとりに停めん時、何心なく見まはして、何等の感も
なく行過ぎ得べきか。 見かへれば、彼處なるは、あは
れを今も七百年の後に引く六代御前の杜なり。 木
がらし其の梢に鳴りつ。

十二月の末の或日、年は迫れども、童は何時も氣樂な
る風の子、十三才を頭に、九つまで位が七八人、砂山の
麓に集りて、何事をか評議まちく、立てるもあり、砂
に肱を埋めて頬杖つけるもあり、坐れるもあり。 此
の時、日は西に入りぬ。

評議のこと定まりけん、童等は思ひくゝに波打際を
駈けめぐり始めぬ。入江の端より端へと、おのがじ
し見るが間に分れ散れり。汐遠くひき去りしあと
に残るは、朽ちたる板、縁缺けたる椀、竹の片、木の片、柄
の折れし柄杓などの色々、皆一昨日の夜の荒れの名
残なるべし。童等は一々これらを拾ひ集めぬ。集
めて之を水際を去る程よき處、乾ける砂の上を選び
て積みたり。積みし物は悉く濡れ居たり。
此の寒き夕まぐれ、童等何事を始めたるぞ。日の西
に入りてより程経たり。箱根足柄の上を包むと見

小坪の浦
田越村の内に
在る海

えし雲は、黄金色に染まりぬ。小坪の浦に歸る漁船
の、風落ちて陸近ければにや、帆を下して漕ぎゆくも
あり。ガラス碎け失せし鏡の額縁めきたるを拾ひ
て、「これを焼くは惜しき心地す」と言ふ兒の丸顔、色黒
けれど愛らし。「されどそは必ず能く燃ゆ」と、此の群
の年かさなる子、おのが力に餘る程の太き丸太を置
きつゝ言へり。「其の丸太は燃えじ」と丸顔の子いふ。
「いな、燃さず置くべき」と、年上の子いきまきて立ちぬ。
傍に一人、「今日は獲物の何時になく多きやうなり」と、
喜ばしげに叫びぬ。

童等の願は是等の獲物を燃さん事なり。赤き炎は彼者の狂喜なり、走りて之を躍り越えんことは互の誇なり。されば彼等このたびは、砂山の彼方より、枯草の類を集め來りぬ。年上の子、先に立ちて此等に火を移せば、童等は丸く火を取巻きて立ち、竹の節の破るゝ音を今かくと待てり。されど燃ゆるは枯草のみ。燃えては消えぬ。煙のみ徒らに立昇りて、木にも竹にも火は容易く燃付かず。鏡の框は僅かに焦げ、丸太の端よりは、怪しげなる音して湯氣を吹けり。童等は交るゝ、砂に頭押しつけ、口を尖ら

して吹けど、生憎に煙眼に入りて、皆の顔は泣きたらん如し。

沖は早や暗うなれり。江の島の影も見分け難くなりぬ。干潟を鳴きつれて飛ぶ千鳥の聲のみ聞えて、彼方此方ものさびしく、其の姿見えざると見れば、夕闇に白きものはそれなり。あわただしく飛びゆくは、鳴かの葦間よりや起ちけん。

火の燃付かざるを口惜しく思ひつゝも、日暮れたればとて、子供等の家路に馳せさりし後、拾木は忽ち風に誘はれて火を起し、濃き煙渦巻き上り、紅の炎の舌

江の島
神奈川県鎌倉郡川口村(片瀬)陸を距る數町、鎌倉から二里餘

見えつ隠れつす。竹の節裂くる音聞え、火の子舞立ちぬ。火は今正しく燃付きたり。されど童等はそを知らざりき。今は海暮れ、濱も暮れぬ。冬の淋しき夜となりぬ。此の淋しき逗子の濱に、主なき火はさびしく燃えつ。

一二 たき火 その二

忽ち見る、水際を辿りて、火の方へと近づき来る黒き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡りて濱に出て、濱傳ひに小坪街道へと志

しぬるなり。火を目がけて小走に歩む、其の足音重し。噎れし聲にて、「よき火や」と幽かに叫びつ。杖をげ捨てて、忙がしく背の小包をおろし、兩の手を先づ炎の上に翳しぬ。其の手は震ひ、其の膝はわなゝきたり。「げに寒き夜かな」言ふ齒の根も合はぬが如し。炎は赤く其の顔を照らしぬ。皺の深さよ。眼いたく凹み、其の光は濁りて鈍し。頭髮も鬣も胡麻鹽にて塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頬は土色せり。あはれ、何處の誰ぞや、さしてゆく先は何處ぞ、行衛定めぬ旅なるかも。

「げに寒き夜かな。」獨りごちし時、總身を心ありげに震ひぬ。斯くて温まりし掌もて、心地よげに顔を摩りたり。いたく古びて、所々古綿の現はれし衣の、火に近き裾のあたりより湯氣を放つは、朝の雨に霑ひて、なほ乾かすことだに得ざりしなるべし。

「あな、心地よき火や。」言ひつゝ、投げやりし杖を拾ひて、之を力に片足を揚げ、火の上に翳しぬ。脚絆も足袋も紺の色褪せ、血色なき小指現はれぬ。一聲高く竹の裂くる音して、勢よく燃上りし炎は足を焦さんとす。されど翁は足を引かざりき。

「げに心地よき火や。」たが燃しつゝる火ぞ、忝し。言ひさして足を替へつ。「十とせの昔、楽しき爐見捨てぬるより此の方、未だ此のやうなる嬉しき火に遇はざりき。」言ひつゝ、火の奥を見つむる目ざしは、遠きものを眺むるが如し。火の奥には過ぎし昔の爐の火、昔のまゝに描かれやしつらん。鮮かに現はるゝものは兒にや孫にや。「昔の火は楽しく、今の火は悲し。あらず、あらず、昔は昔、今は今、心地よき此の火や。」言ふ聲は震ひぬ。あらくしく杖を投げやりつ。火を背になし、沖の方を前にして立ち、體をそらせ、兩の

拳もて腰をたゝきたり。仰ぎ見る大ぞら、晴れに晴れて黒ずみ、星河霜をつゝみて、遠くく伊豆の岬角に垂れたり。

身うち煖くなりまさりゆき濡れたる衣の裾も袖も乾きぬ。「あゝ、此の火、たがもやしつる火ぞ。たがためにとてたがもやしつるぞ。」今や翁の心は感謝の情に満たされつ、老の眼は涙ぐみたり。風なく波なく、さし來る潮のしみぐと砂を浸す音を、翁は眼閉ぢて聽きぬ。さすらふ旅の憂さも、此の刹那にや忘れはてけん、翁が心、今一たび童の昔に返りぬ。

あはれ、此の火やうくに消えなんとす。竹も燃盡き、板も燃盡きぬ。かの太き丸太のみは、猶良く燃えたり。されど翁は最早これを惜しとも思はざりき。たゞ立去際に、名殘惜しくてや、兩手もて輪をつくり、抱くやうに胸のあたりまで火の上に翳しつ、眼しばたゝきてありしが、いざとばかり腰うちのばし、二足三足行かんとして立返れり。燃残りたる木の端々を掻集めて火に加へつ。勢よく燃上るを見て、心地よげに打笑みぬ。

翁の行きし後、火は紅の光を放ちて、寂寞たる夜の闇

國木田獨歩
名は哲夫。小説家。明治四十一年歿、三十八歳

乃木夫人
名は靜子
大將
乃木希典

の中に、覺束なく燃えたり。夜更け、汐満ち、童等がたきし火も、旅の翁が足跡も、永久の波に消されぬ。

(國木田獨歩——武藏野)

一三 乃木夫人の儉素

夫は伯爵大將なり。其の妻たるもの、若し一片虚飾を追ふの心あらんか、美衣・腴食思ふが儘ならんのみ。然るに乃木夫人が之をなさざりしは、實に其の性格・修養の由つて然らしむる所ならずんばならず。大將が、武人は馬車に乗るものにあらずとして、常に乘

馬にて外出せるが如く、伯爵夫人たる靜子は、僅かに一二人の下女を相手として、自ら臺所仕事に従ふの



乃木夫人

餘暇、會餘儀なき事情ありて外出する際には、綿服か、精々細ぐらひの粗服を着けて、電車の吊革にぶら下り行くこ

と珍しからざりき。

日露戦争終結を告げて、旅順奉天に偉功を樹てたる

新坂邸
東京市赤坂區
新坂町に在る

乃木將軍の、近々凱旋すべしと傳へらるゝ頃なりき。一日或人、將軍の留守宅にては、如何に夫人が諸般の準備を整へて、待受くるかを知らんとて、新坂邸を訪問したりき。邸内塵一つ止めず掃き清められたる中を、導かるゝ儘に裏手に廻れば、そこに五十路近き品好き老女が、箒を手にして今や廐の掃除最中なるを見たり。彼の女は引詰めたる頭髮をくるくゝと巻き、縞目も覺束なき木綿着の裾をきりゝと端折り、塵取を持てる下女を相手に、餘念もなく立働き居るなりき。訪問客は書生の紹介によりて、此の老女こ

そ伯爵夫人その人なるを知り、暫時は挨拶の辭に苦しみぬ。やがて來意を告げしに、私どもでは別に是ぞと待受は致しません。只主人は日頃馬を大事にしますから、せめて廐などは掃き清めて置きたいと思ひまして、斯様に汚い所をお目に掛けまして、誠にお氣の毒で御座いますと語られぬ。凱旋將軍の待受に廐の掃除とは、武士の妻ならでは思ひも寄らぬ所、聞くだにおのづから涙の湧く心地せらる。夫人は飽くまでも儉素の家風を守りて、一向に華美を戒め、髪は何時も引詰の束髪に結び、儀式の時にあ

らざれば、髮結の手にかけし事なく、將軍夫人と呼ばるる人が、常に手織木綿の衣服を着け、夜の物も亦袖なき木綿蒲團の硬きをかけ、飯は常に三分の米に七分の稗を交へしものなりき。

夫人が自らの服装などには、一向頓着せざりし事に就き、面白き逸話少なからず。日露戦争中の事、雨にも風にもめげず、虎の門なる金刀比羅宮に日参して、祈念を籠むる一婦人あり。神職はそを唯田舎の婦人ならんと思ひるたるに、後に至り、あれこそ名に高き乃木夫人よ。」と人より聞きて、始めて驚ける程なり

虎の門
東京市芝區

きといふ。

又或年、關西地方の大演習に参加したる乃木將軍は、歸途伊勢參宮を思ひ立ち、名古屋停車場前なる某旅館に泊る前、東京なる夫人に書面を出し、伊勢大神宮に參拜する考なれば、大禮服を持來れ。お前も紋服にて共に參拜せよ。」と言送りぬ。此の書信を得たる夫人は早速支度を整へ、自分は木綿の紋服着て、其の旅館に泊らんとせしに、店の者は質素極まれる夫人を見て、何處かの田舎老婆の紛れ込めるならんと思ひ、薄暗き片隅の一室に通し、さて宿帳を附けんとせ

しに、夫人は「今日は夫も来りて共に宿る筈なれば、宿帳ば其の時の事とし、ともかく風呂に入りたし」と頼みたれど、目先の利かぬ番頭は飽くまで輕蔑して、風呂に案内せざるのみか、澁茶をすら薦めざりし所へ、乃木大將來着し、家内が来て居る筈ぢやが」と言はれて、始めて曩の田舎老婆がそれなりと氣付き、主人の恐縮一方ならず、急に座敷を取換へ、茶菓子を持込むなど、大狼狽を演じたりと云ふ。

將軍の姪にあたる娘の婚禮の際、夫人は媒酌人某大佐夫人と、支度の相談に及びて斯く言へり、「若い者に

遅塚麗水
名は金太郎
都新聞社員

餘り質素な支度では、ほんとに可愛さうだと存じますが、決して縮緬物を着せないのは、乃木家の家憲で御座いますから、私も斯うして木綿物や紬ばかりを着て居ります。今度は姪の一生一度の結婚式ですから、やつと紋羽二重を着せる事にしました」と。勤儉は實に乃木家の家憲なりしなり。(遅塚麗水—貞烈乃木夫人)

一四 夫の名譽を祝はれし挨拶

此書たまはるを辱くお上ごみは此は
花もゆききに終ひたらんまづは皆々様は機

嫌よくしてせられしめでたくなり新聞
 の種にきくなどはし心かゝの事にはへとも
 先生乃お陰より唯一の樂みよ路に死よ
 臨むまで心を慰めりし事今も先生の
 所賜物と深くし禮申し上へ幸際出逢乃
 ニりあちよると一時間ばるる帰る致しつ
 出征するよし知れどもを僅かた四日なれど
 やけり先生吹きし竹を取出し千鳥と
 ハ千代とを今も終りて是が最後なりん

八代操子
 海軍大將男爵
 八代六郎氏の
 夫人

とわしてあらよ出費致は仁川の折
 もささきと存存再びは丹誠を頂く幸
 のありやハ計りがくくは身舞き舞く
 したるは禮つきせぬなごりや上へ
 めげたくかしく

(八代操子)

一五 中央公園

何でも調子はづれに馬鹿々々しく大きな事の好き
 な米國で、また最も大きな都會は、五百萬の人間が一

ガリバー旅行記
 イギリスのスキフトといふ人の書いたお伽話
 リリパット
 この物語の中にある小人國の名
 プロブデイングナツグ
 同書の中にある大人國の名

塊になつて、大きな事ばかりを考へてゐるニューヨークである。小さい日本の中でも、最も可愛らしい京都といふ都からこゝへ來ると、ガリバー旅行記の小人國リリパットから、大人國のプロブデイングナツグへ上陸して、大いに度膽を抜かれたやうな恰好である。

そこで、大きいものに出つくはしたら何でもせゝら笑つてくれようと、私はかねてから十分覺悟をして行つた。幸にして何を見てもせゝら笑つてやることが出來た。決して驚いてはやらなかつた。が、こ

こに一つ私をして驚くどころか、頗る閉口せしめた上、これでもかといつて、たうとう私を降参させてしまつたものがある。

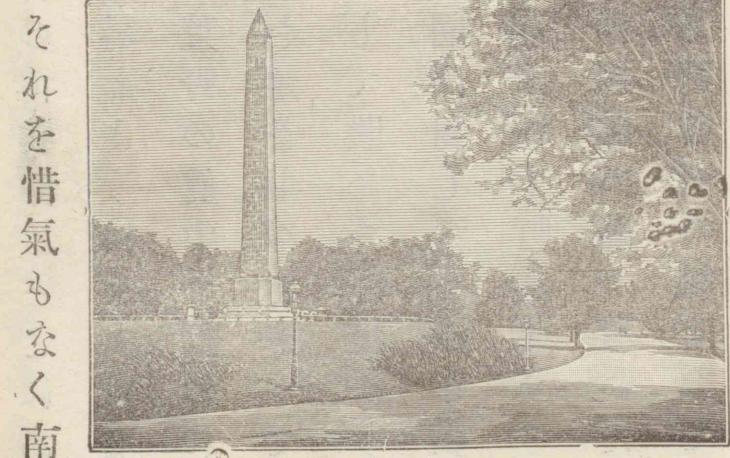
去年の二月の初、ニューヨークへ着いてから三日目の午前であつた。一つ博物館を見に行かうと思つて、まだ土地の勝手も分らないのに、大吹雪の中を一人て宿を飛びだした。博物館は公園の東通り第五街にある。ところが私が一かど心得顔に乗つた電車は、その方へは行かずに途中から曲つて、公園の西通りへ出た。しかたがないから、博物館の見當にあ

たる八十丁目あたりで、私は下りた。なかに公園の事だから、この邊を真直に通り返して東の方へ三四町も歩けば博物館に到着疑なしと獨合點したのがそもそもの誤。大雪の降りしきる中に、人通りはおろか犬ころ一匹ゐないところを、痛い足を引きずつて、行けども行けども博物館らしいものは見當らぬやがて小山のやうな處へ上つて見ると、そこには馬鹿馬鹿しく大きな池がある。何でもニューヨーク全市に水を供給する貯水池はこれであるらしい。寒さと疲労とで弱りはてた私は、今更あとへ引きか

へす事もならず、さりとて肝腎の博物館はどこにあるのやら影も形も見えない。尋ねようにも人はない。まるでシベリヤの大きな荒野の真中で行暮れたやうな心細さであつた。痛む足をじつと撫つて漫々たる池の水を獨り茫然として眺めた時ばかりは、此のとてつもない大きな公園に對して、心から私は兜を脱いだ。仕方がないからまた十町あまりも足を引きずつて、やつとのこと博物館へ辿り着いた時は、もう氣息奄々として病める野良犬の如く、とても陳列館などを見る勇氣も何もなかつた。是は私

が如何なる場合にても、地圖や數字に不注意である
天罰だと云つて友人が笑
つた。

この大公園はその名の示
す如く、市の中央目抜の地
にあつて、假に之を私有地
だとすれば、確かに土一升
金一升の地面。ちやうど
東京の日本橋あたりか大
阪の船場の様な位置にある。



中 央 公 園

日本橋
商業繁華の區
船場
大阪市中の繁
華な地

上野公園
東京市下谷區
自然の形勝に
すぐれてゐる
日比谷公園
東京市麹町區
人工の造庭及
び運動場等の
設備にすぐれ
てゐる

ハドソン河
北部の山に
發し、ニューク
ホークに注ぐ
リバーサイ
ド
河岸町
オアシス
沙漠の中にあ
つて、橡樹清泉
のある地區

北二哩半、東西約一哩をしきつて公園とし、巨萬の財
を之に投じて園藝術の極致を盡し、ちやうど上野公
園と日比谷公園とを合せたやうな設備をしたもの
である。その餘りに廣大なために、ニューヨーク土
着の人ですから、屢々、この中で道に迷ふといふのは有
名な話である。ニューヨークの市中には、ハドソン
河畔リバーサイドか、さもなくば餘程場末でもな
ければ、市人が獨占の庭園と目すべきものは決して
ない。そこで大小無數の公園は、ロンドン人が所謂
市の肺臓ともなり、黃塵萬丈の地にオアシスともな

つて五百萬の市民に貴賤貧富の別ちなき共同の恩恵を與へるのである。私は土一升金一升の町の真中に、こんなただつ廣い大きい公園があらうとは夢にも知らぬので、驚かされるのみか、閉口し降參させられたのであつた。

ハイドパーク
ケンシントン
ガーデンととも
にロンドンの
名高い公園

ロンドンに遊んだ人は、誰でもハイドパークの大きいのに呆れる。其の面積は三百六十一エーカーでこれに隣したケンシントンガーデンを合せると六百三十一エーカー、即ち七十七萬八千五百坪、東京の日比谷公園の十八倍もある。しかしニューヨーク

の中央公園は八百七十九エーカーの地を占めて、ロンドンの此の二大公園を合せたよりも更に遙に大きいのである。たしかに日本人の度膽を抜くに足るものである。

(厨川白村—印象記)

厨川白村
名は辰夫。京
都帝國大學文
學部教授

一六 滋賀の山越

雪ならば幾たび袖を拂はまし

花の吹雪の滋賀の山越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、ながめも飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそ

滋賀の山
近江國滋賀郡
滋賀村の山嶺
北は比叡の脈
を受け、南は
長良山・彦坂
山に連る

辛崎
普通唐崎と書く。近江國滋賀郡下坂本村の大字。辛崎の夜雨は八景の一。

堅田

同國同郡にある。堅田の落雁は八景の一。

比良

同國同郡、木戸・小松二村の西山。比良の暮雪は八景の一。

坂本

近江國滋賀郡に在る。今坂本村と下坂本村とに分れてゐる。

我が故郷

近江國高島郡小川村

れならで、霏々たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚をつんざく。

辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。辛崎の松は暮靄朦朧の間に隠れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴きわたる。見わたせば白雪皚々たる比良の嶺、今より此の山路にかゝらば、山中にて日は暮れん、疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて宿を求めんか」と、獨旅の少年は前路を睨んで、しばらく湖畔に立ちたりしが、やゝありて思ひかへし、かの山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許

に着くなるに、何とて空しく此所に留らん。夜にてもあれ朝にてもあれ、家に歸らば疲もいとほじ。いで、心を取りなほし、今宵の中に此の山を越えんものを」と、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて只一人、辿りくゞて行く道の岩に躓き木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、猶も心を勵まして、風雪の中を登り行く。聽て日は暮れたり。闇の夜ながら雪

藤太郎
中江藤樹の幼名

明りに路は見ゆれど、彌増す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。一山寂寞として、耳に聞ゆるもの



とては、閉ぢし氷の下潜る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を中江藤樹壓して、枝折れ雪落つる響

て、怖しとも悲しとも譬へんやうなし。斯かる難處と知りもせば、麓にて一夜を明かししものを、旅馴れぬ身の悲しさ、足に任せて此の深山路へ掛りしが、今

は足疲れ身體凍りて、先へも出られず、後へも戻られず。少年は進退谷まりて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓を感じて、寒さは一入身に沁みわたり、眠るとも無く死ぬとも無く、前後も知らずなりにけり。

懐かしの故郷や、藤太郎は昔覚えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲も打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。か

の家は我が友の家なりけり、此の家には我に優しき老人有りきなど、昔の事を想ひ出でて、坐るにあはれを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ、枝繁れり。脩竹一叢思ふ儘に根を延ばして、彼方此方に生出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の蔭より内に入りて、勝手の方を見れば、車

井の軋る音さへも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事なき母様が、此の雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後より其の袂を引き、母様、私が汲みませう。と涙ながらに取継る。事の不意なるに母は驚きて振返り、誰か、藤太郎、どうして此處へ。藤太郎は細き聲、はい、母様の御手助を致しに参りました。先づ内へお入り遊ばせ、おつむ

叔父
祖父吉長のこ
と

りに雪が掛ります」と、孝子の眞情、片時も母を此の雪の中に立たしめざらんとす。母は車井の綱を確と握りし儘、石の如く立てり。「叔父様とでも御一緒か。」
「いえ、一人で御座います。」母は聲を勵まし、叔父様が一人和郎をお出しなされたか。「いえ、叔父様には知らせずに参りました。」母は眉を揚げ、怪しからぬ。なぜそんな事を。さあ、お話しなさい、和郎が歸つた譯を。いえ、此處で聞きませう。聞かない内は、滅多に家へは入れません。」颯と吹來る朝風に、地上の雪はくるくると捲揚げられて、横に二人の顔を撲つ。

藤太郎はありし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根に、すゝろ涙に咽びしが、忽ち思ひかへしけん、態と言葉を勵まして、和郎は此の母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父様に頼む時、一旦國を出たかは、天晴れ立派な人にならない内は、決して中途で歸るな」と、あれ程堅く言聞かせた事を忘れましたか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯和郎を立派な者にしたい許り。立派な者にならないで、家に居て手助をしてくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び逢

大隅

大洲
伊豫國喜多郡
に在る。當時
加藤貞泰六萬
石の城下

ひません。其の足ですぐ大洲へお歸りなさい。餘りのことに、藤太郎は默然として詞も出でず、力抜けて、雪の上に跪きぬ。母は其の失望せる様子を見て、痛はしと胸に満ち、斯くまで我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も辛き事も多かりしならん、せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして復思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。和郎は母の言ふ事が解りませんか」と

強くは叱れど聲はうるみぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、「はい、解りました。『それならば今から歸りますか。』藤太郎は悲しき聲、「はい、歸ります」と素直に言ふ。母は素直に答へられては、猶更腸の絞らるる思。遂に堪へ兼ねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を飲む。藤太郎は屹として立上れり。母様、此の薬は輝の妙薬で、世にも得難き品、これ差上げたいと態々持つて参りました。是だけはお取りなされて下され。」と、新谷にて得し妙薬を差出す。母は快く、「お、和

新谷
大洲から六里
の處にある

郎の志、是だけは受けませう。と、手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとして上を向く。互に見合す顔と顔、二人の眼には涙一杯。母は恥かしと、ちつと耐ふる心の苦しき、子は堪へざりけん、薬を手より取落してうつ向けば、雪の上にはほろほろと落つる涙。雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣くく我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。満天の風雪

路悠々。

(村井敬齋—近江聖人)

村井敬齋
小説家、文章家

十六人云々
義經、兄頼朝
と不和になり
一先づ吉野山
に隠れてゐた
が、こゝにも
長く止ること
ができないで
主従十六人の
背と奥州の方
へ落ちて行か
うとするので
ある
信夫
岩代國信夫郡
もと信夫庄と
いふ。信夫の
佐藤庄司とは
元治のこと

一七 忠信吉野にとどまる

十六人思ひくゝに落ちかゝる所に、音に聞えたる剛の者あり。先祖を委しくたづぬるに、鎌足大臣の後胤、佐藤師治が孫、信夫の佐藤庄司が二男、四郎兵衛藤原の忠信と言ふ侍なり。人も多く候に、御前に進み出で、雪の上に跪きて申しけるは、君はこれより御心安く落ちさせ給ひ候へ。忠信は此處に止まり候うて、麓の大眾を待ちえて、一方の防矢仕り、一先づ落し

屋島の戦

文治元年二月
義經が平家を
破つた戦。
屋島は讃岐國
木田郡

能登殿

能登守平教經

秀衡

奥州の豪族藤
原秀衡

治承二年
(一一八三)

參らせ候は「や」と申しければ、尤も志は嬉しけれど
も、御邊の兄繼信が、屋島の軍の時、義經が爲に命を捨
て、能登殿の矢さきに中りて亡せしかども、是まで御
邊のつき給ひたれば、兄弟ながら、未だある心地して
こそ思ひつれ。年の内は、思へばいく程もなし。人
も命あり、我も長らへたらば、明年の正月ウヰの末、二月初フタツキ
には、陸奥へ下らんずれば、御邊も下りて、秀衡をも見
よかし。又信夫の里に、とどめ置きし妻子をも今一
度見給へかし」と仰せられければ、「さ承り候ひぬ。治
承二年の秋の頃、陸奥を罷り出て候ひし時も、今日よ

武藏坊
辨慶

りして、君に命を奉りて、名を後代にあげよ。矢にも
あたり死しけると聞かば、孝養は秀衡が代りていた
すべし。高名度々に及ばば、勳功は君の御はからひ。
とこそ申し含められしか。命を生きて、故郷へ歸れ
と申したる事も候はず。信夫に止め候ひし母一人
候も、其の時を最期とばかりこそ、申し切りて候ひし
か。弓箭とる身のならひ、今日は人の身の上、明日は
我が身の上、皆かくこそ候はん。君こそ御心弱く渡
らせ給ひ候とも、人々それよき様に申させ給ひ候へ
や」とぞ申しける。武藏坊、之を聞きて申しけるは、「弓

熊野

矢取る者の言葉は綸言に同じ。一旦出しつゝる事を、
ひるがへす事は候はじ。ただ心安く御暇を賜はり
たし」とぞ申しける。
判官しばらく物をも仰せられざりけるが、やゝあり
て、惜むとも叶ふまじ。さらば心にまかせよ」とぞ仰
せられける。忠信承りて嬉しげに思ひて、たゞ一人
吉野の奥にぞ留まりける。
判官また忠信を近く召して、仰せられけるは、御邊が
佩きたる太刀は、寸の長さ太刀なれば、身の疲れたる
時悪しかりなん。これを以て最後の軍せよ」とて、黄

熊野の別當
紀伊熊野神社
の別當湛増。
壇浦台戦の時
源氏に味方を
した

杖

金作の太刀の、地膚^{ハダ}心も及ばざるを、取出して賜はり
けり。「此の太刀、寸こそ短けれども、身に置いては逸
物にてあるぞ。義経も身にかへて思ふ太刀なり。
それをいかにと言ふに、平家の兵ども、兵船を揃へし
時に、熊野の別當の、権現の御劍を申しおろして賜ひ
しを、信心を致したりしによりてや、三年に朝敵をた
ひらげて、義朝の會稽の恥を雪ぎたりき。命にかへ
て思へども、御邊も身にかはれば取らするぞ。義経
に添うたりと思へ」とぞ仰せられける。
四郎兵衛之を賜はりて戴き、あはれ御佩刀や。これ

基衡
藤原秀衡の父

御覽候へ。兄にて候ひし繼信は、八島の合戦に、君の御命に代り參らせて候ひしかば、奥州の基衡が參らせて候ひし太夫黒といふ馬を給はりて、冥途までも乗り候ひぬ。忠信、忠をいたし候へば、御秘藏の御佩刀賜はりて候ひぬ。之を人の上と思召すべからず。誰もく、皆かくこそ候はんずれ」と申しければ、おのおの涙をぞ流しける。

判官重ねて仰せけるは、御邊が着たる鎧は、いかなる鎧ぞ。是は繼信が最期の時、着て候ひし」と申せば、それは能登守の矢にたまらず、徹りたりし鎧の頼む所な

し。衆徒の中には、聞ゆる精兵のありけるぞ。是を着よ」とて、緋緘の鎧に、白星の冑をそへて賜はりけり。着たりける鎧を脱ぎて、雪の上にさし置き、雑色共にたび候へ」と申しければ、義經も着替ふべき鎧もなし。とて、召しぞ換へられける。まことに例なき御事にぞありける。

さて「故郷に思ひ置く事はなきか」と仰せられければ「我も人も衆生界の習にて、などか故郷の事を思はざらん。國を出てし時、三歳になり候ふ子を、一人とどめ置きて候ひしぞ。かの者に心付きて、父はいづこ

平泉
陸中國磐井郡
平泉村・奥州
藤原氏の居館
のあつた地

やらんと尋ね候ふべきなれば聞かまほしく候へ。
平泉出でし時、君ははや御立ち候ひしかば、鳥の鳴き
て通るやりに、信夫をうち通り候ひしに、母の所に立
ちより、暇ごひ候ひしかば、齡おとろへて、二人の子ど
もの袖にすがりて、悲しみ候ひしこと今の様に覺え
候。『老の末になりて、我ばかりものを思ふ、子供に縁
のなき身なりけり。』信夫の庄司に過ぎわかれ、一方
ならぬ歎なれども、和殿ばかりを成人させて、一所に
こそなけれども、國の中にありと思へば頼もしくこ
そ思ひつるに、秀衡何と思召し候ふやらん、二人の子

どもを皆御供せさせ給へば、一旦の恨はさることな
れども、子どもを成人させて、人數に思はれ奉るこそ
嬉しけれ。隙なく合戦に逢ふとも、臆病の振舞して、
父のかばねに血をあえし給ふなよ。高名して、四國
西國の果におはすとも、一年二年に、一度も命あらん
程は、下りて見もし見えられよ。一人とどまりて、一
人たえたるだに悲しきに、二人ながら遙々と別れて
は、いかがせん。とて、聲も惜まらず泣き候ひしを振りす
て、さ承り候。とばかり申して、打出で候よりこのか
た、三四年終に音信も仕らず。去年の春の頃、わざと

人を下して、繼信討たれ候ひぬ。」と告げて候ひしかば、身もたえなんと悲しみ候ひけるが、繼信が事はさて力及ばず。明年の春の頃にもなりなば、忠信が下らんと云ふ嬉しさよ。はや今年の月日も過ぎよかしなどと待ち候なるに、君の御下り候はゞ母にて候ふ者、急ぎ平泉へ參り、忠信は何處に候ぞ。」と申さば、繼信は屋島、忠信は吉野にて討たれけると承りて、いかばかり嘆き候はんずらん。それこそ罪深く覺えて候へ。君の御下り候うて、御心やすく、渡らせおはしまし候はゞ、繼信、忠信が孝養は候はずとも、母一人、不便

義經記
源義經の一生
を脚色した小
説。作者不明
足利時代初期
の作

白石・才川
いづれも陸前
國刈田郡

の仰をこそ預り度候へ。」と申しも果てず、袖を顔におしあて、泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も、皆鎧の袖をぞ濡しける。
(義經記による)

一八 甲冑堂

奥州白石の城下から一里半南に、才川といふ驛がある。この才川の町はづれに、高福寺といふ寺がある。今はこの寺もすつかれ荒れて、僧も住まぬ空寺となり、本尊さへどこへ取收めたのか、寺には見えな。庭には草深く生ひ茂つて、まことに狐・梟のすみかと

もいふべき有様。この寺の境内に又一つの小堂があつて、俗に甲冑堂と呼んでゐる。大きさはやつと二間四方ほどの小堂である。本尊さへ右の始末であるから、この小堂の荒れかたは又ひどいものだ。やうく縁に上つて見ると、内には佛もなく、たゞ婦人の甲冑して長刀を持った木像を二體安置してある。土地の人に尋ねると、佐藤繼信忠信二人の妻の像だといふ。

昔、義經が兄頼朝の旗揚を聞き、秀衡に暇乞して鎌倉へ赴く時、秀衡の家來佐藤莊司元治は、わが子の繼信

御供に
出た

鎌倉
の
御供
に
出た

龜井・片岡

引經

能登守平教經

忠信は云々

忠信は吉野山
に止つて敵を
退け、後、京
都に出て、屋
有秀の兵に圍
まれて自殺し

忠信を御供に出した。義經は兄を援けて京都に攻上り、遂に平家を追ひおとして、一の谷・屋島などで大功を立てたが、兄に憎まれて再び奥州へ下つて來た。この時、始から義經に附従つてゐた龜井・片岡などは、皆無事で歸國したけれど、繼信は屋島で教經の矢先にかゝり、忠信は義經に代つて京都で自殺し、兄弟二人とも他國の土となつて、たゞ形見の品ばかり故郷へ歸つた。無事で歸つた人々を見るにつけても、老母の悲嘆は一方でない。せめて一人でも、この人々のやうに歸つて來てくれたならばと泣悲しむ有様の

を見て、兄弟の妻がその心を思ひやり、わが夫の甲冑を着、長刀を脇挟み、勇ましげに出てたつて、「唯今兄弟凱陣」と、その佛を真似て、老母の心を慰めたといふ話である。

その頃の人々が、二人の婦人の孝心を感じ、その姿を木像に刻んで残したのが、この甲冑堂の由來だといふ。嗚呼佐藤兄弟は古今に並びなき忠勇の士である。その人に連添うた婦人も亦、かやうに孝行の心が深かつたといへば、夫婦ともに忠孝の鑑といふべき、世に珍しい話である。私は此の話を聞き此の像

を拜して、徐ろに落涙を催したのである。かほどまで、孝子の鑑となるべき婦人の像が、今は香華を手向ける人もなく、荒れはてた小堂の中に、雨風を防ぎかねて立つのを見ては、世に忠孝の道は滅びたのか、もし此のまゝで年月を経たら、遂には跡形もなくなつて、これらの話を語り傳へる人さへもなくなるであらうと、餘りにははれに感じたので、聊かこゝに書止めておく。

(東遊記による)

東遊記
橋南翁の旅行
記

十九 雪の山里

津輕領

徳川時代に於て津輕侯の治めた領地。今の青森縣の地

津輕領の青森といふところの南に當りて、甲田山といへる高山あり。其の峯參差として指を立てたる如く八つあれば、土俗八つ甲田といふ。叡山、愛宕などのごとき山を、三つも五つも重ね上げたるが如き高山なり。津輕領の人、勇氣たくましき者、又は罪を得て姿をかくすものなど、津輕の關所、南部の關所ともに抜けんとするに、極月より二月三月の頃までは、此の甲田山の絶頂をさして、雪の上を眞一文字に登り、磁石を立て、南部地は東南の方と志し、其の方角にあたる方をさして眞直にすべりおつる事なりと

南部

今の盛岡縣の地。南部侯の領地

外の濱

陸奥津輕郡の沿海の地
蟹田、蓬田、今別、三馬屋、同國東津輕郡の村

ぞ。常なみの本道をめぐり行く時は、五十里、七十里、或は百里にもあまる所を、わづかに一日二日の間に行きつくなり。この外、津輕の外の濱邊、蟹田、蓬田邊よりも、今別、三馬屋邊へ、雪中には、眞直に山を越えて、甚だ近く行かる事なり。其の餘、一里、二里、五里、七里の程ちかきところにかくの如く雪の上を越えて、近道となる所甚だ多し。常々は皆雜樹或は熊笹など生え茂りて、通ひがたき所なり。北地數十丈の雪積り、殊に嚴寒の國なれば、雪皆積るより凍りて甚だ堅く、いかに踏む

仙臺御先祖
伊達政宗

とも、おちいるといふ事もなし。南國の雪の様子とは、大いに違ひたるものなり。寒中に彼の地に遊ばずば、信じがたき事なり、仙臺御先祖政宗卿の歌に、
なかなかにつら折なる道たえて
雪にとりの近きやまぎと
といへるも、かねては解しがたくおぼえしが、此等の事を見聞きて、始めて此の歌を感じり。
彼の政宗卿も戰國の最中に生れ、殊に東方の夷にて、其の頃に勇猛の名高く、叱咤の威あたるものなく、今に至り天下一二の大諸侯と呼べるゝもとるを開き

橘南谿

徳川時代後期の人。京都の醫者で旅行を好み、東遊記、西遊記などの旅行記を著した

しも、たゞ兵馬の力のみと思ひしが、やさしき詩歌などにも志ありて、まことに文武兼備、豪傑の大將といふべし。
(橘南谿——東遊記)

二〇 大石良雄 その一

赤穂の城下は早馬の爲に大騒となりぬ。江戸城刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門・茅野三平は、直ちに馬に跨りて、日に行くこと三十里、五日にして赤穂に達し、變を國老大石良雄に報じたるなり。長矩自殺の命下るや、原惣右衛門・大石瀨左衛門は、更に同

早水藤左衛門

名は滿莚、四十七士の一人、此の時三十八

茅野三平

名は常成、四十七士の一人、此の時三十五

大石良雄

通稱内藏助、(一三三—一三六)

長矩

淺野氏 (三三七)
原惣右衛門

名は元辰、四十七士の一人

大石瀨左衛門

名は信清。四十七士の一人
時に年二十五

大野九郎兵衛

名は知房

じ早さを以て赤穂に達したり。君家事あり、衆情恟恟、危機は始めて英傑を呼出だせり。門閥に於て國中たぐふ者なく、而も温厚にして庸愚なるが如き大石良雄は、こゝに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光をつゝめる彼は、衆人に驚異せられぬ。赤穂城中の會議は開けたり。事情は愈、明かになりぬ。大野黨は隠然として分れぬ。大野九郎兵衛は良雄と同じく赤穂の家老にして、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れたりしかば、班は良雄の下に在

大學頭長廣

長矩より三三歳若き弟。長矩に嗣子が無かつたので、長廣は此の時相續者であつた

大垣侯

大垣は美濃國

りと雖も、勢力は極めて大なりき。彼は専ら幕府の命に恭順すべきを唱説して、成るべく温和に城を明渡さんことを主張せり。然れども血氣にはやる藩士等は、彼を以て卑劣なり不忠なりとし、官使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり、「まづ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめん事を幕府に乞ふべし」と。越えて二日、城中の會議は再び始まれり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を述べたり。多くの人は良雄に左袒せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭

安八郡城主戸田采女正は長矩母方の従弟

四月十九日
元祿十四年
(二雲)

を立てんと請ふ事の却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は生まれり。四月十九日、大野は遂に遁逃せり。人は減ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の説を執れり。復讐の説は勝てり。血判に與るもの百十餘人、その中、江戸より來つて難に投ずるもの僅かに十八人。道路は清潔にせられたり。人民は警戒せられたり。四月十八日、赤穂城の上より、受城使の來るは望まれ

筆蹟

富 上ひろくと尾の楳や秋の暮 七十六翁 素丸子 鳴鶴に果あはれ也秋のくれ 藤太 歸る帆は管屋のぬしかあきのくれ

たり。藩士の血は湧けり。良雄は極力彼等をして静肅ならしめたり。使者は往返せり。望月城は難



なく明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穂藩士の餘りに穩和な

るに驚きたり。良雄は京都の山科に住して優游自適せり。田園を

山科
山城國宇治郡
京都・大津間

上杉氏
米澤侯上杉綱
益綱の實子であ
る

三月十五日
元政十四年淺
野長矩歿の
日

買ひ居宅を營みて、永住を粧へり。彼は斯くの如くして身を四通五達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏の諜者を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護する事に努め、人を遣はして吉良氏の邸を守らしめ、且その采邑の人に非ざれば、婢僕に用ふることなからしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて困難なりき。年は暮れぬ。忘れがたき三月十五日は再び來りぬ。

華岳寺
曹洞宗、淺野
家三代の墓所

吉田兼亮
通稱忠左衛門
四十七士の一人。此時年六十二

赤穂の華岳寺は市民の手向くる香花に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。斯くて花は謝し鶯は老いて、四條河原の夕涼に、都の群衆雜沓する頃となりぬ。腰拔賣國破廉恥の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。而も彼は恬として與り知らざるものの如し。忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來る。曰ふ、七月十八日、長廣藝州に預けられたり。と。一縷の望は絶えぬ。此の時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は弛み始めたり。眞に復讐の念なく、長廣に依りて、君家

石束氏
良雄の妻陸女
の父石束源兵衛
但馬豊原藩
の家老
良金
通稱主税。四
十七士の一人
此の時年十五

の或は再興せられん事を希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、亦復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等に其の眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。此の年十月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金を携へて江戸に向ひぬ。

二一 大石良雄のその二

本邸の所
本所松坂町に
あつた

吉良氏の防衛は猶密なりき。彼は其の本所の邸を以て卑濕なりとし、之を修補するまで、麻布なる上杉氏の別邸に住めり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は、餘命の覺束なきを以て、早く事を濟さんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然吉良氏を襲うて、一死を賭せんと欲せり。而も良雄は聽かざりき。良雄父子は直ちに江戸に入る事を敢へてせざりき。彼はまづ池上の平間村に在りて、吉良氏の動靜を覗ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。父子は

池上
武蔵國荏原郡
大石の西南二
十餘町

變名して、垣見五郎兵衛、同佐内と名乗りぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。十二月に至つて、吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年等は之を窺へり。彼等は何處より來り何處へ去るを知らず、五更に至つて他の一隊と交代せり。流石の吉良氏も之に氣付かざりき。而も間諜探偵すべて效を奏せず、祕密は却つて吉良家へ出入する茶道より、同盟の一人横川宗判ムネサダに漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明かになりぬ。復讐の日は即ち定まりぬ。

横川宗判
道稱勘平、四
十七士の一人
此の時三十六

淺野長澄
長矩の室の實
家。備後國三
次城主
瑤泉院夫人
名は阿入理
淺野長治の女

十二月十三日に至つて、良雄は卒然淺野長澄の邸に至りて、長矩の後室瑤泉院夫人に謁し、主家の預り金を會計して、其の餘剩を還せり。而もかの一事は猶祕して語らざりき。蓋し夫人は夙に賢を以て藩士に欽仰せらる。去年の變、大學頭長廣は老中の命を受け、取る物も取敢へず、走り還つて夫人に告げたり。夫人は少しも驚かず、徐ろに問へり、「仇人は誰にして、其の死生は如何」と。長廣は義央の死生を知らざりき。夫人は曰へり、「更に登城して後再び我を訪はれよ。兄死して、弟たるもの、仇の存亡を知らざること

義央
吉良氏。通稱
上野介。徳川
幕府の高家、
舊儀に然る
(一三三)

泉岳寺
東京芝高輪車
町門庵和尙
の開基

やはある」と。斯くて夫人は終身長廣に遇はざりき。翌十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて、長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。此の夕、雪霏々たり。同盟者はやうやくあつまれり。火事装束せる四十七個の人物は、三隊にわかれて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬨諍叫喚の聲は聞えたり。既にして笛は再び鳴れり。火事装束せる四十七個の人物は、吉良邸を出去れり。夜景は初の寂寞に返れり。例の如く十五日を祝す雪霽れて夜も亦明けたり。

べき登城の諸侯と武士とは、城をさして鹵簿を急げり。忽ち聞く路人の喧嘈なるを。始めて知りぬ、赤穂の浪士が吉良氏の邸を襲うて、義央の首を獲たりと。

良雄は吉田兼亮・富森正因を、大目付仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀んで其の志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置き、て壯士を勞へり。

此の日、良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川・久松・毛利

富森正因
通稱助右衛門
人・此の十七の
三十三の一年

細川
熊本藩主

久松 松山藩主
毛利 長府藩主
水野 岡崎藩主
細川綱利 忠興から四代
當時の藩主

水野の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と

共に細川氏に、良金は他の九

人と共に久松氏に。

元祿十六年二月四日、四十六

人は死を賜はれり。細川綱

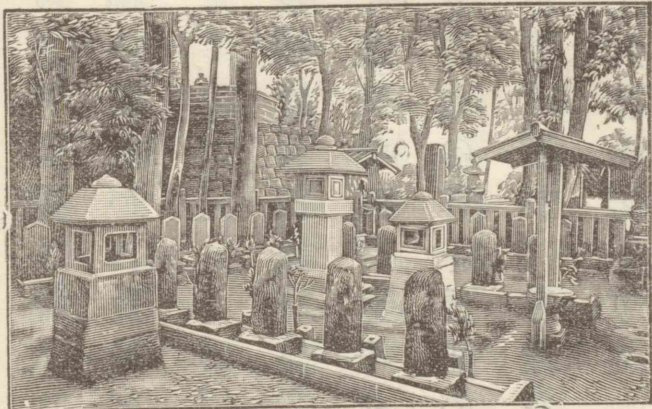
利は良雄等に訣別の盃を賜

へり。良雄は他の十六人と

共に、幕府の檢使の前に自裁

せり。

良雄は外温藉にして、内に枉ぐべからざる意志を有



墓の士七十四

したりき。彼は何事も打靜めて、騒がしきことを嫌
ひたりき。彼は如何なる場合にも、長者たる品位を
失墜せざりき。然れども彼は徒らに平和を愛する
ものに非ず。爲す事は必ず爲し遂げ得べき主一と
堅忍とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべか
らず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が
同盟の首領として成功せし所以のもの、職として此
の品性ありしに由れり。

(山路愛山—愛山文集)

山路愛山
名は吉歴
史の學及び文
章に長じた人
大正六年歿、
年五十四

二二 鶯宿梅

平五十四
大正六年
紀氏。醍醐天
皇時代の歌人
古今集の撰者
(一六〇)

さゝねど人も訪ね來ず
藁屋佗しくおちぶれて
歌に名高き貫之の
娘といふも恥かしや
金も寶もなき家に
似あはぬものといはれても
これぞわが世の慰めと
軒端をかざる梅の花
うぐひすこそは日々の友
起き出づる吾を待ちがほに

香翼も軽く香をちらし來れど
朝日の歌をうたひつゝ
里のおとづれいかにして
お雲の上まで聞えけん
紅梅召すと御使の
くだるは花のほまれなり
されどとゞまるわが身こそ
心さびしきわかれなれ
せんかたなさに歌一首
枝に結びてたてまつる

平五十四
大正六年
紀氏。醍醐天
皇時代の歌人
古今集の撰者
(一六〇)

藤岡作太郎
文學博士。國
文學者。明治
四十三年歿。
年四十一

徳川光友
家康の孫義直
の男、尾張の
國主

勅なればいともかしこし鶯の

やどはと問はゞいかゞこたへん

(藤岡作太郎)

二三 徳川光友の室

長局の方俄に物騒し。「あれよ、あれよ」と叫ぶ聲、ばたばたと走る音、たゞ事ならずと覺ゆ。夫人は居室に在り。悠然として騒がす、徐ろに侍女に命じぬ。

「五條を召せ。」

老女五條は召に應じて來れり。顔色青ざめ呼吸い

そがはし。

「何事ぞ。」

夫人の言葉未だ終らず、五條は早くも口を開けり。

「一大事の候。只今、中山茂兵衛、奥女中を刺殺し、血刀を提げて部屋々々を騒がし候。あれく、あのやうに騒ぎ居り候。こゝにおはしましては心元なし。早々御動座遊ばさるべし。」

夫人はきつと五條の顔を見遣りぬ。

「それしきの事、なに一大事と云ふべきぞ。茂兵衛は亂心せりところ覺ゆれ。當番の男ども頓て取鎮

むべければ、構へて騒ぐべからず。そこに居よ。何の周章つる事かある。」夫人は端然として座を動かさず。茂兵衛は間もなく庭中の井戸に身を投じて果てけり。事即ち已みぬ。

中一年は夢の如くに過ぎぬ。

「去年の今日は、茂兵衛の奥女中を殺しし日に候はずや。あの時の恐ろしき、今に忘れ候はず。」侍女等次の室に在りて、當時の事ども語り合ひけり。折柄一天俄かに搔曇れり。風捲き、雨奔り、電閃き、雷

轟く。天色黯澹、晝なほ夜の如し。

侍女等は顛ひ戦きぬ。夫人は平然として常の如し。忽然として火柱立ちぬ。轟々として天地も碎けんばかりに鳴りはためきぬ。先に茂兵衛の投ぜし井戸に雷落ちけるなり。侍女或は倒れ、或は氣絶す。夫人は自若として神色平生の如し。

人はこゝに投じ、雷はこゝに落つ。

「不吉の井戸は埋めんこそ好けれ。」奥役の議は忽ちに決しぬ。

夫人は大久保金兵衛を召して諭せり。

「雷の落ちたる井戸を不祥なりとせば、此の邸、此の庭、また皆不祥として改むべきにあらずや。井戸は底を浚へ水を替ふれば、仔細なきものぞ。舊き井戸を塞ぎて、新しき井戸を穿つは、人を勞するのみにて、何の益もなき事ぞかし。」

金兵衛其の理に服しぬ。埋井の議乃ち止む。夫人の言ふ所理義極めて明白、人をして之を争ふ辭なからしむ。識見高邁なるにあらずんば能はじ、賢夫と謂ふべし。

(熊田葦城—報知新聞)

熊田葦城
名は常次郎。
もと報知新聞
記者

二四 山伏姿の俊基

久子
正成の妻

元亨三年
後醍醐天皇の
年號。一九八
三年

久子は正成に嫁して以來、鴛鴦の契極めて睦じく、楠木の館はますく、和氣に満ちた。時は元亨三年、河内の連山に紅葉を飾る晩秋のことであつた。日は早西山に傾いたころ、眉目秀でて、どことなく威容のある一人の山伏が、笈を脊負うて、ながの旅路につかれた足を曳きながら、楠木の館に來た。「頼まう」と音なへば、取次は直ちに出て、

「何用にて。」

「愚僧は諸國の靈山に詣づる修驗者、何卒一夜の宿を御頼みいたす。」

との申入れ、正成は取次から委細を聞いて、
「何か仔細ありげなる旅僧よ。無禮なきやう、一間に案内致しおけ。」と命じて、家老の恩地左近を接待役とし、お久の方に旨を含め、膳部を整へて、慇懃にもてなさしめ、やがて正成自身其の室に來て左右を退け、初對面の挨拶終つて徐ろに聞いた。

「貴僧にはいづれよりいづれに渡らせらるゝか。」

「思ふ仔細ありて京を立出で、那智・金剛・葛城などの

那智
紀伊國熊野郡
にある山

金剛

三
一八八
三三

金剛

大和・河内の
國境に聳える
高峯

葛城

大和葛城郡の
西に亘る連峰

鎌倉殿

執權北條高時

靈山に詣づる所存。

「都には此の節何事もおはさぬか。」と正成は意味ありげなる問を放つた。山伏は威儀を正し、

「打續く天變地妖に、都のみならず、秋津の島が根、何處とても人心恟々。これも皆鎌倉殿の政道のあやまり、其の儀につき、篤と御邊にかたらひたき、所存あつて、かくは身をやつし罷り出でたる次第ぢや。」

「かねて仔細の候ことと量りしが、かく申さるゝ御身は何人におはする。」

「身は日野俊基と申す。」

日野俊基

藤原氏、後醍醐天皇の忠臣

俊基といへば、當時朝家に仕へて、帝の親任深き忠良の臣である。正成は座を下り、

「存ぜぬ事とて慮外の非禮、平に御宥恕を願ひ申す。」
「誠意籠れる御もてなし、俊基有難う存ずる。」

さて、俊基は詳かに北條の失政を語り、さらに關東征伐の密計を述べ、笈より錦旗を出だして正成に示した。正成は恭しく錦旗を拜し、二人ともに夜の更くるまで北條討伐の機密を語り合ふのであつた。

翌日俊基は楠木の館を辭し、紀州路として、出立した。正成は俊基を門に送つて己が室に歸り、

「久どの。ここに參られい」と呼んで、「只今旅立たれた山伏は、實は京の公家方ぢや」とさゝやいた。

「なみく、ならぬ御人品。定めし左様の事かと存じました。」

「あれこそは日野俊基卿と申し、日野資朝卿と並んで今上の股肱にておはすのぢや。」
「その公家殿が、斯かる姿に身をやつさせらるゝ仔細は。」

「さ、其の儀につき、篤と聞かせおくことがある。固く心に秘めて聞きやれ。鎌倉の北條高時、泰時、時頼、

日野資朝
藤原氏。後醍醐天皇の忠臣

時宗等の父祖に似もやらず。政道紊れて上は萬乘の君に背き奉り、下は萬民の憂を醸し、天下の悲をよそにするゆゑ、畏くも帝には諸國の豪族に討伐の綸旨を下し給ふため、資朝卿も山伏姿に身をやつして美濃・飛驒より東國に下らせられ、俊基卿は大和・河内を経て紀州に入り、やがて中國・九州にも赴かせらるる御計畫ぢや。

お久の方が瞬もせずじつと聞くを見遣つて、正成は更に言葉をつゞけ、
「されば時節到來して、いよく討伐の場合には、此

の身は眞先き掛けて忠勤を抽んずる所存ぢや。御身も今より覺悟定めて置くがよい。」

「御心安く思召せ。不束ながら如何なる事にも當ります。」と答へたお久の方の美しい眸は、此の時一しほ輝いて見えた。
(楠公夫人)

二五 春を待ちつゝ

暖い雨が降つて来るやうになりました。来るか來るかと思つて、此の雨を待侘びて居た心地は、何と申したらよいでせう。私どもは五箇月も前から、旅の

冬籠の間、唯そればかり待つて居たやうなものでした。さう申しては何ですが、私どもの周圍にあつたものの事を思つて見て下さい。佛蘭西國境の山地寄の方では、塹壕が積雪の爲に深く埋められたとか、戦線に立つ者の霜焼を救ふ爲に、毛布を募集するとか、さう云ふ勞苦を思ひ遣る市民の心が、今日まで續いて來ました。開戦以來、五六十萬の佛蘭西人は既に死んで居ると云ふ話です。此の戦争が終る頃には、満足な身體でもつて巴里へ歸つて來る者は少なからうと云ふ話です。私共が町で行逢ふ留守居の

婦女でも老人でも子供でも、頓て來る春を待つて居ない者は無いやうでした。寒苦々々、この避け難い戦争の悩みの中で、世界の苦みの中で、草木の再生がやがて自分等の再生である事を願つて居ない者は殆どありませんまい。

去年に比べると、今年は並木の發芽もずつと後れをしました。プラターヌの木などは、まだ冬枯そのまゝです。漸くマロニエの芽が、ポツ／＼膨らんで來た所です。併し日は餘程長くなりました。空も明るくなつて來ました。もはや煖爐なしに暮せます。一

プラターヌ
(佛語、英語)
プラターナス
に同じ、サヤ
かけの木と
譯す、街路の
並木にする木

雨毎に、私どもは春の來るのを感じます。有らゆる草木が生返る中で、やがて來る若葉の世界を待つのも楽しみです。あの、白い蠟燭を立てたやうなマロニエの花が、若葉の間に咲いて、冷たい硝子窓からも、石の壁からも、春の焰が流れて來るやうな日は、最早遠くはないでせう。

さう言へば、燕のかはりに、獨逸の飛行船が飛んで來ました。レオン、ドーデーの言草ではないが、あの「空中の海賊」が、巴里の市中と市外とに爆彈を落して行つたのは、三月二十三日の夜でした。損害も大した

レオン、ドーデー
アルフオンス
ドーデーの子
現存のフラン
スの文學者
(1868—)
三月二十三
日
大正四年

事はなかつたと言ひます。實は私などはそれを知らずに熟睡して居た位です。「あの昨夜の騒を知つてゐるか。敵の飛行船を目がけて撃つた深夜の砲撃を聞いたか。」と人に言はれて、始めてさうかと知つた位です。「なぜ獨逸軍はあんな詰らない事をするのか。」斯う人々は言合ひました。「恐らく獨逸軍はそれを何等かの政略に供し、新聞紙上に吹聴し、漸く戦争に疲れて來た國內の不平の聲を静めようとするのであらう。」斯う言ふ人もありました。翌二十四日には、町々の警戒は一層厳しくなり、有らゆる街

路の燈火も消されました。そよ／＼とした南風が吹いて来るやうな夕方でした。淡い新月の光も空にありました。火ともし頃にはや窓を閉めるのは惜しい氣が致しました。其の晩は床に就いてからけた、ましい物の音に眼を覺しました。自動車で飛ぶ警戒の喇叭が、深夜の町々を駆けめぐりました。翌朝になつて、又敵の飛行船が近づいたことを知りましたが、佛蘭西側の飛行機の邀へ襲ふのに逢つて、其の晩はパリまでは來られなかつたとの事でした。今はパリも一時の様に包圍されかゝつた位置でな

ツエツペリ

獨逸ツエツペ
リン伯の發明
製作した飛行
船

島崎藤村
名は春樹。新
體詩人。小説
家

いし、市は出来るだけの警戒を怠らないし、露西亞の戦報は奥太利方面の勝利を傳へて居る際です。獨逸のツエツペリンが襲つて來たと言つても、他で聞き電報で傳へられる程の騒でもない事を申上げたと思ひます。七時の夕飯時が來ました。今一回斯の御便を書足したいと思ひますが、今日はこれで筆をとめます。

(島崎藤村—戦争とパリ)

二六 春のおとづれ

寒い北風が吹き初めると、私は先づ、冬の間子供等を

丈夫に過させたいと云ふ事を願つて、出来るだけ努力する。そして其の他の事はあまり考へた事も無い。特に寒暑に感じ易い様な弱い皮膚を持つて居るうちの子供にとつて、格別の病氣もさせずに冬を越すと云ふ事は、實際かなりの大仕事なので、側に居る私の心労は、夜も晝も休まる時は無い。

「春になつたら」と云ふ言葉は、幼い子供の口からも度繰返される。「戸山が原へ草摘みに行きませうね。」
「え、お辨當を持つてね。」こんな言葉を幾度も繰返して待つ我が家の春は、兎に角私の冬中の重荷の下

戸山が原
東京の郊外半
込區に屬す

りる楽しい日なのである。

寒い日は、朝起きて手水鉢の厚氷を砕く音が、身にしみる様に思ふ。朝になつてから汲入れた水までが薄く凍つて居るのを見ると、いつ此の寒さがゆるむのであらうと、情ない様な心持になるが、或朝氷の少し薄いのを砕く時、また、或朝昨夜の儘少しも凍らな
い手水鉢を見る時などの嬉しさは、何と云ひ表はず事も出来ない。暖かな日光をあびて、籠から放された小雀の様に、子供は喜んで、自由に戸外に遊んで居る。臺所の空地で、二三日毎に酒屋の小僧が炭を切

つて居たのが、いつとなしに一日、二日と間が延びる。味噌の用が心もち減つて来る。此の頃から漸く朝少し早く起きられる様になるのも心地よい。障子を閉めて置けないやうな麗らかな日は、どうしても家にぢつとして居られない様な氣持になる。子供をつれて、ついそこの近郊に出ると、何處の家でも一杯に日をうけた縁や干場に、蒲團や洗濯物を一杯干してゐる。方々で新しい材木をカン／＼打つて、貸家らしい家を新築して居る。空には雲のちぎれも見えないのに、遠くの煙突の煙がゆるく上つ

三宅やす子
故理學博士三
宅恒方氏夫人

クリフトン
ナイヤガラ
の瀑の左岸にあ
る町

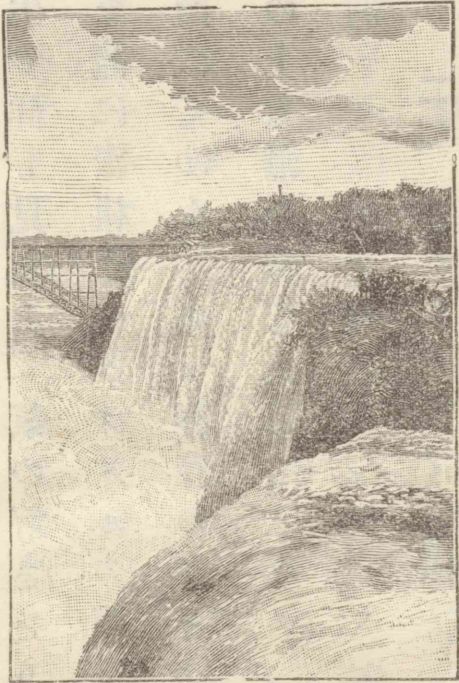
て居るのも春めかしい。やがて廣い原に出ると、子供等が籠などを提げて遊び廻つて居る。遠くに學生の群も見える。氣の好ささうなお爺さんが、小さな籠に蜜柑とキャラメルの箱を入れて、丘をさして擔つてゆく。あゝ春、春のおとづれば、私にとつて、此の上も無い喜である。

三宅やす子—心のあと

二七 ナイヤガラの瀑

英領加奈陀のクリフトン町クリフトンホテルの樓上で、朝餉の麵麩を引裂きながら、真正面に世界一の

ナイヤガラの瀑を見る。閉めきつた硝子窓の中にあつて、猶明かに其の響を聞くのもことわり、四時を



(一) 瀑のラガヤイナ

分たず、晝夜に絶えぬ百雷が、ところどころに鳴渡つて、四十餘里の遠方に達すると云ふ。

朝靄の深く罩めて居たのが、日が高りなるまゝに、先づ左の亞米利加瀑から晴れかゝる。瀑の幅百餘丈

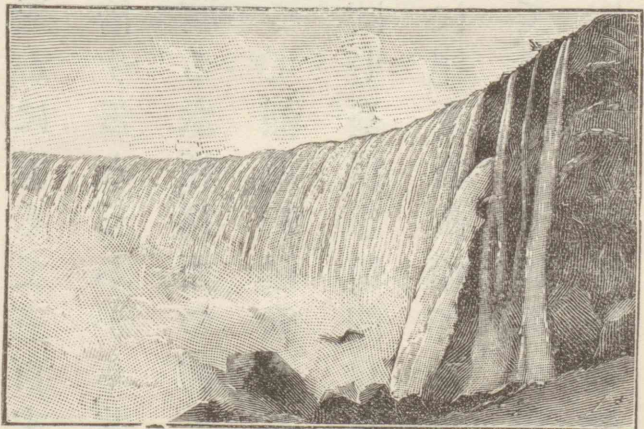
那智の瀧
加歌山縣那智山に在る。高さ八十丈。幅三間
布引の瀧
兵庫縣武庫郡

高さ十六七丈間に小島を隔てて、右の加奈陀瀑は高さは一丈餘り低いけれど、幅は遙かに廣くて三百丈に餘り、水量は亞米利加瀑に九倍すると云ふから、其の勢の凄じさ譬へん方なく、捲騰る水煙、滿天の霧となり雲となつて、濠々漠々、時あつて烈風が瀑壺から起つて、吹拂ふ雲霧の斷間に、しばし全景を垣間見るばかり、偉觀とも壯觀とも言語に絶えた次第である。しかし「たき」と云ふ言葉からして、まだ見ない人の思ひうかべる景色とは、全く相違した稀代な有様である。那智の瀧、布引の瀧、音羽の瀧などの眼に慣れた

布引山に在る
神戸市の北約
一里
音羽の瀧
京都府愛宕郡
比叡山の麓に
在る。高さ二
丈

形はもとよりのこと、物の名につけてある蒟蒻の白瀧着物の瀧縞、どれ一つ細長いものを意味せぬものはない。しかるにナイヤガラ落水は、縦と横との割合が全然これとちがった太い短い形である。布引は布引にちがひないが、豎に引きはへないで、横に張つた布である。譬

(二) 瀧のラガヤイナ



へば苗代の水が畦を溢れる様な景色で、一向「たき」と

李白
唐朝の詩人
(七〇一—七六二)
矜羯羅童子
制吒迦童子
共に不動明王
の使者たる八
大童子の二で
明王の脇に立
つ

云ふ氣にならない。それに深谷幽谷の間に在るのではなく、平湖の水が平湖に移るのに段がついて居るだけであるから、漢詩に云ふ「一條白練挂危岑」とか、「萬丈銀河舞翠巒」とかの深邃な趣がない。おまけに、兩岩處狭く煉瓦家が立並んで居るのであるもの。此の瀑を李白に見せても詩にならず、矜羯羅童子、制吒迦童子をあしらつた所で、到底有難くは拜まれまい。つまり仰山一點張、風流氣なしの亞米利加式である。崖下の小亭に坐して、瓢の酒を傾けながら、又はホテルの二階でバタを舐りながら、水力

ナイヤガラ
河

合衆國と加奈
陀との境を流
れる。長さ三
十六哩

電氣の發達でも感歎するが、若しくは時間表を繰展
げながら、電車に乗つて廻覽すべきものである。併
し瀑でないと言ふ事は出來ない。勿論世界第一と
いふ株は、何處からも故障を申込む事は出來ぬ。
ホテルの門前の大鐵橋は、英領から米領へ、ナイヤガ
ラ河を渡らせる。橋の兩端には兩國の税關がある。
馬車を驅つてそこを一廻りして、さて亞米利加瀑
の瀑頭に臨む。石橋を渡れば小島がある。此の小
島によつて加奈陀瀑と二つに分れて居るのである。
遠く南を望めば、一碧天を涵して、際涯のない大湖の

澁川玄耳
名は柳次郎。
もと東京朝日
新聞記者

水が漸く迫つて、此方へ向つて奔る。湖口愈、狭りし
て流愈、急に、幾段の瀬となり瀑となつて、湍りつ、淀み
つ、渦巻きつ、沸^{ツギ}り立つて、此の小島の兩岸に激し、急奔
直下、かの懸崖に向ふ。瀑となるまでの數哩の此の
急湍も、またかの兩大瀑に劣らぬ壯觀をなして居る。
湖上の數峰、湖畔の籬落、畫趣は瀧になくして、却つて
此處に多いかと思ふ。殊に此の間に散點した三つ
の小島は、奇巖老樹の布置、自然の妙を盡して居る。

(澁川玄耳—世界見物)

二八 俳句評釋

俳句の妙味は終に説明すべからず。されど字句の
解釋はさまで難きにあらず。今初學のために二三
の古句を解説し、併せて多少の批評をなすべし。

何事ぞ花見る人の長刀去來

長刀をさしたる人の花見に出かけたるを咎めたる
なり。花見とならば、いかめしき長刀をさして群集
の中へ出づるにもおよぶまじきに、その無風流は何
事ぞと嘲りたるなり。これらは多少の理窟を含み
をるゆゑに、俗間に傳はり稱せらるれども、名句とい
ふは必ずしもこの種の句に限らざるなり。

去來
芭蕉の高弟向
井氏

嵐雪
芭蕉の高弟服
部氏

蒲團着て寝たる姿や東山嵐雪

これは實景を知らぬ人にはその味を解しがたし。
試に京都に行きて、つくぐと東山を見るべし。低
き山の近くに在りて、しかも頂の少しづつ高低ある
處、恰も人が蒲團を被りて寝たるに似たり。されば
こそ此の譬喩的の吟ありたるなれ。品のよき句に
はあらぬど、滑稽と輕妙とを以て勝りたるものにて
容易に模倣し得べからず。又此の句につきては、多
くの人の氣づかざる特色あり。そは冬の季といふ
ことなり。さすがの都も冬枯れして、見るものとして

寂しく寒からぬはなきが中に、かの東山を見れば、こ
れも春頃のなまめきたる様を失ひて、唯ひつそりと
寒さうに横たはる處、蒲團うち被りて寝たりと見れ
ば、寂しさの中に、多少のをかしみもありて、何となく
面白う感ぜらるゝなり。

其角

芭蕉の高弟
本氏

わが雪と思へば輕し傘の上 其 角

普通には「我がものと思へば輕し傘の雪」として傳は
れり。されど、「我が物」としては甚だ俗なり。「わが雪」
の方に従ふべし。意味は解釋するまでもなし。此
の句斬新を以て賞すべし。若しこれを模倣する者

あらば、直に邪路に陥ること必定なり。

丈艸

芭蕉の高弟
藤氏

わが事と泥鰯の逃げし根芹かな 丈 艸

芹は春のはじめのものなり。芹摘みにと手を出し
たれば、芹のあたりに居たる泥鰯の、捕へられんとや
恐れけん、あちらに逃げ隠れたりといふ意にて、泥鰯
を擬人して、軽くおどけたる處、丈艸の獨擅場なり。

蓼太

嵐雪の孫弟子
大島氏

世の中は三日見ぬまに櫻かな 蓼 太

名高き句にて世の人大方は知れり。誰にも分る句
にして、しかも理窟を含みたれば、世人には賞翫せら
る。されど、理窟を含みたるもの必ずしも善くはあ

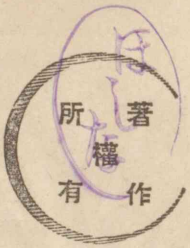
らず。此の句格調頗る下品なり。俗には「三日見ぬ間の」と傳へたれども、矢張り「見ぬ間に」の方よろし。「の」とすれば全く譬喩となりて味少く、「に」とすれば「櫻が主となりて實景となる故に、多少の趣を生ずべし。」

(正岡子規—俳諧大要)

大正女子國文讀本 修正版卷四

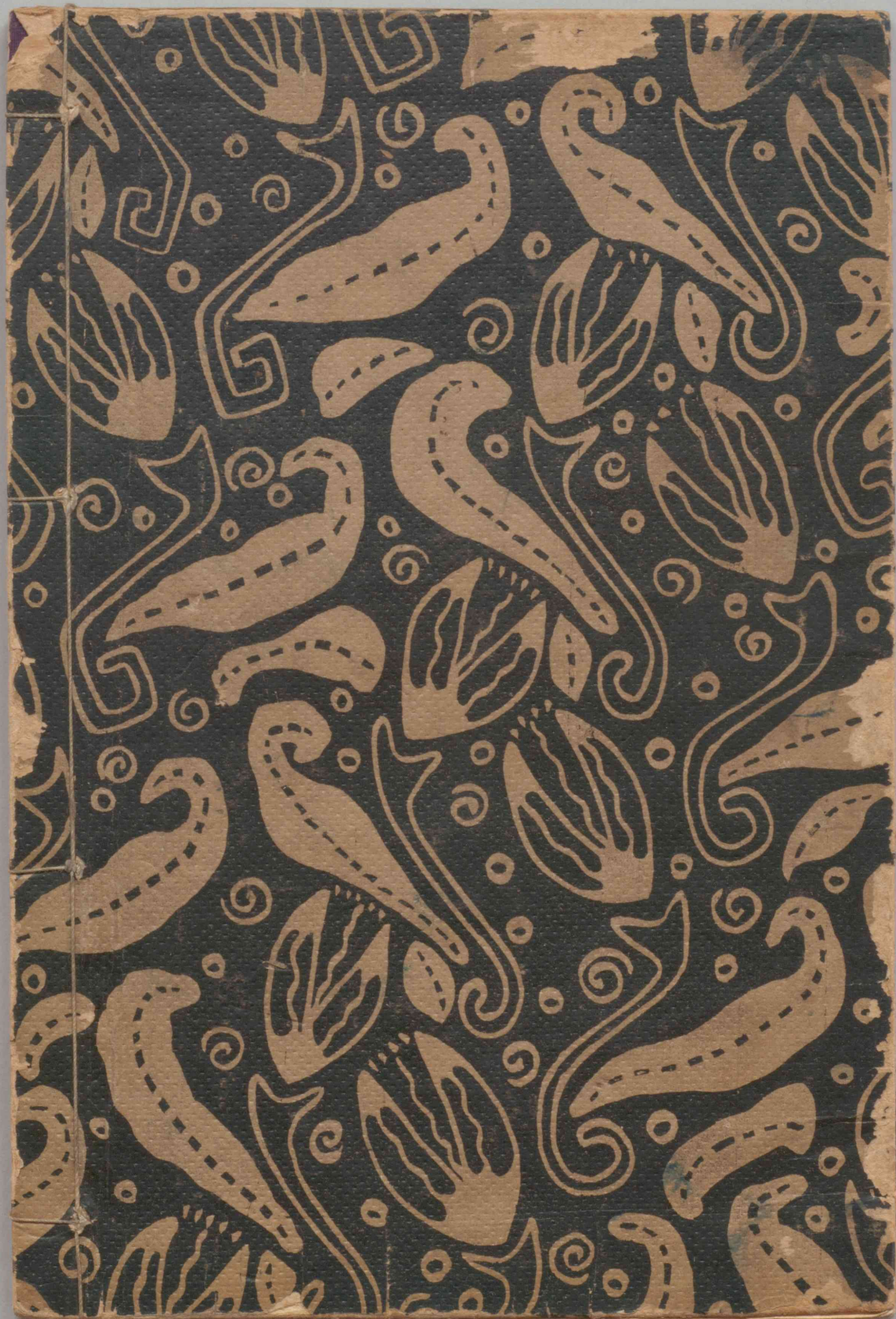
大正七年九月廿五日 印刷
 大正七年九月廿八日 訂正再版發行
 大正七年九月廿九日 訂正再版發行
 大正七年九月三十日 訂正再版發行
 大正七年十月一日 訂正再版發行

大正女子國文讀本修正版 全拾册
 卷四、定價金參拾六錢
 臨時定價 金六拾壹錢



著者 東京市麴町區土手三番町三十六番地 保科孝一
 發行者 東京市牛込區白銀町廿九番地 合資會社 育英書院
 右代表者 目黒甚
 印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十七番地 佐久間衡治
 印刷所 育英會社

發行所 東京市牛込區白銀町廿九番地 合資會社 育英書院
 振替口座(東京)七四二一番
 發行所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 目黒書店
 振替口座(東京)二八〇九番





イリクサ
ラカヘ
マハリ
〔ヘイサウチャウ〕
マハリ
〔イヨイヨ〕
〔センシ〕
〔トゲマシタ〕

カヘ
マハリ
〔イヨイヨ〕
〔タシ〕
〔タシ〕
〔タシ〕

カヘ
マハリ
〔イヨイヨ〕
〔タシ〕
〔タシ〕
〔タシ〕

カヘ
マハリ
〔イヨイヨ〕
〔タシ〕
〔タシ〕
〔タシ〕

オハナシ

◆^{ホシ}メイヂ三十七年ニニッボンノクニトロシヤ
トセンサウシタトキ、日本ノカイグン
ハロシヤノグンカンヲリヨジユンノ
ミナトノチカクデヤブツタノデ、テキハ

⑦タヅネ